勇者って呼んでっ！

末獅 メル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者って呼んでっ！

【Nコード】
N0747V

【作者名】
未獅　メル

【あらすじ】
姉が条咲学園を中退してから一年の月日が経った。
『あの学園にはね、勇者伝説があるの。きっと蒼ちゃん気に入るよ！』その姉の言葉を
信じて僕は今年、その学園の高等部へと進路を決めた。自称『生徒会執行部』やら
『勇者伝説探求部』と言った日常とは、かけ離れた組織と謎のさくらんぼ女と小さい頃の
『勇者』という言葉の意味も全部、僕はまだ何も知らなかったんだ

――

※感想等随時受け付けております。拙作ですがより良い作品にしたいと思いますので宜しくお願いします。　１０月４日

prologue

「お前、勇者になりたいんだっけ？　あはは、面白いこと言うじゃんか」

「面白いって……どこがですか……」

「勇者なんてガキじみた夢、捨てれば？」

「ガキじみてなんて……ないよ！」

「ゼッテー、ガキの夢だろ。それともなに？　ちっちゃい頃の夢を小学3年生が？」

「そうじゃ……ないけど」

「勇者っていうのは、誰かを守る力が必要でな、お前みたいに毎日苛められる奴とはまったく違うし。バカじゃね」

「……違くない！」

「橘？　お前、俺たちにそんな態度で言えるんだっけ？」

「うっ……その……力より……助けたいと思えば……」

「だったら証明してみてよ」

「ひぃ！」

「首を掴まれ、怯えるなんて勇者より前に、お前は”チキン”だ」

「チキン……おいしいの？」

「お前なぁ……バカだな？　あぁ？」

「……や、やめてよ！」

「そういえばお前……秋山と仲良かったよな？」

「う、うん」

「仲悪くなるようにずっと無視するなら俺達の仲間へ入れてやるぜ？　どうする？」

「……アリスに悪いから……」

「お前……本当にチキンだな」

「……」

「とりあえず、秋山を無視すれば俺たちの仲間、これ条件」

「い、嫌だよ！」

「嫌？　あれれ？　お前？」

「……そんな力……無いでしょ？」

「現にお前が首を絞められてるの分かってるの？」

「……僕はアリスを守るんだ！」

「口ならいくらでも言えるよ。役に立たない、お前なんか” 死ねば良いんだ！ ”」

” 死ねば良いんだ” なんとも寂しい言葉が、僕の、全身を震えさせて気持ちが悪くなってきた……、きっと僕は死んだ方が良い、それは実感していたが人に言われると心が……荒んで目の前が見えなくなってくる。

そんな僕は……一体、” 勇者” になって何の意味があるのだろうか……そんな意味さえ考えず幼き日の僕はただひたすら” 誰かを守れる勇者” になりたい気持ちであったのだ——

一話　橘家の日常

　ＰＰＰＰＰＰＰＰＰＰＰＰ。いつも以上に耳元で鳴り大音量で現実へと引き戻す道具、目覚まし時計によって僕は相変わらず起こしていただいている。これは感謝すべきことなのかな。

目覚まし時計の天辺を誰かの頭の上に手を置くようにして止めると大音量は止まる。そしてＯＦＦにしないと再び有り難迷惑の大音量が僕の部屋で鳴り響き、耳の鼓膜を刺激する。
「あと、五分」と言う相手もいないが故に渋々、まだ肌寒い春の朝へと身体をベットから乗り出してカーテンを開ける。そこには燦々と輝く太陽が……いや、訂正。物凄く雨……僕の心が。
「波浪注意報～、蒼(あお)ちゃん」
　きっとハローと波浪を掛けたと思われるが、やはりそれ一択だ。
「おはよう、琴音姉(ことねねえ)。……窓越しで少ししか聞き取れないが」
　ベランダ側からドアに顔をくっつけて器用に話しかけるのが、姉、橘(たちばな)琴音(ことね)で朝起きで自慢の腰まである茶髪がボサボサだ。毛先はパーマを掛けられて居て、異性として、どストライクというのは内心にとどめておく。そして会話の受け身で自分の部屋から聞いているのが僕、橘(たちばな)蒼汰(そうた)。止むをえなく部屋へと姉を入れるのは正直、外の獣を自分の檻へと招待するも一緒。何故ならば姉はブラコンだからだ。
「おいしょっと、今日も素敵な鱗だね～とか言わないの～？」
「魚類にでも転職する気持だったんですか？」
　ドアを閉めて我ながら適当なツッコミだと思ったが姉はニヤニヤして笑っている。いつ襲われるかなどの警戒も張っておく必要性が見えた。何か欲しい時の姉の癖で右人差指の第二関節を舐めるなどは家族だから知っている。
「おしい、深海魚でした～」

あれだ。スルーも可って奴だ。姉の話をスルーして話を進めるがここ、橘家は二階建一軒家で母は病気で亡くなったが祖父母と父と姉と僕、二世帯五人で暮らしている。僕が小学六年の頃にこっちに引っ越してきてから、僕の部屋は相変わらずのままであって姉の部屋は……汚いままだ。

「おしくない」

――「今日は入学式だね！」

「そうだな」と相槌を打って姉の作ってくれたサラダへ箸を進める。現時刻は七時で新入生は八時に体育館集合と前日の新入生案内書に書いてあった。如何にも見てくれよ、と言わんばかりのライトノベル一冊分の厚さの案内書。誰も見てないと思うが目次に『重要事項』と赤字で書いてあったからそれは見ない訳にも行かなかったわけだ。条咲学園（じょうがさきがくえん）は基本全寮制で自炊も食堂もどっちで食事を取ろうが執事を雇おうが関係なしに自由。ただ、そのせいでもあるのか学園内での『生徒としての時間』の校則は厳しすぎると地元で有名。高校生の必要不可欠な話で言うと『男女交際禁止』と『男女接触禁止』の二つがあげられて一応、健全な保護者からの抗議で騒動が起きたが結局は変わらないままって奴だ。

鯖の味噌煮を一口と。

要するに理事長らへんのお偉いさんはホモ信者って訳だ。多分違うと思うけどそれをネタに出来る漫画研究部の女の子が学園祭一の売り上げを出したとか出さなかったとか。

ほくほくのご飯を一口と。

「そういえばさぁ……蒼汰（そうた）」

不覚にも背中に寒気が走る。食事位置はお互いに目が合うように考慮したと姉が言ってたように真っ正面に姉が居る訳で……。悪寒がするのはともかく名前で呼ばれるのは若干、苦手。嫌な事の前触れと僕は捉えるぞっ！

「あの学園って交際禁止って知ってた？」

ニコニコｆａｃｅは良い事だ。実に良い事だ。だがその笑顔の奥には獣が眠っているのは僕は知っている。それと交際禁止はさっき脳内の話題になったから知らない訳がない。僕は首を素直に縦に振り、目を合わさないようにと右手で味噌汁のお椀を持ち、一気に啜る。こういう際の味って表現しにくいよね。なんか鉄の味がしたのは自分で舌を噛んだからなんだよな。口内炎のようにヒリヒリするよ、畜生。

「知ってるなら問題ないけど……”事故”、起さないでね？」

最後の一言に力が籠っていて、琴音姉は身を乗り出して僕の右手と左手を取り、両手で覆って握りしめる。暖かくて普段は安心できるが安心できない恐怖感が僕には伝わってきたのだ……長年の付き合いだからだよな。

声が漏れることもなく、僕はひたすら頭を縦に振るのだった。

条咲学園までおよそ歩きで十分程度で途中、歩きでも思うＳｌｏｐｅ ｏｆ ｈｅａｒｔ ｂｒｅａｋｉｎｇ（心臓破りの坂）があるのが難点。英語で言ってみたのは心の中の余裕を取り戻すためだから気にしないで。

二階へと再び階段を上り自室へと戻り、荷物の確認をする。荷物はエナメル（小）が二つ用意されていてスクールバック（中）が一つに黒のボストンバッグ（中）が一つ。そのあと、学園へと輸送される荷物が少々で荷物の方は大丈夫だが輸送されてくるのは今日から一週間後。だから事前に買ってある教科書などは自分で今日持っていかなくては1週間授業に出ても無駄な時間を過ごすだけだ。隣の人に見せてもらうと言う手段はあるが基本、最初は隣女子で接触禁止なために見せてもらない。だったら男子と女子で教室分ければ良いとか思うぞ。

腹立たしく思えてきた事実に僕は肩を落とし溜息を吐くのであった。

ぶぅーぶぅーぶぅー――そんなバイブ音で学ランの胸ポケットにある携帯電話を急いで取りだすと『馬鹿な俺様ツインテ先輩』と表記された人からの電話であった。
「もしもし？」
第一声はこんなもので時々、裏返ったりもするんだが今回は相手が相手なために緊張がほぐれて会話出来るものだ。
「あ、蒼汰（そうた）？　俺だ、おはよう」
声の質は良い女の子なのに一人称『俺』とか似合わないな。僕は条件反射の内のおはようを返すと先輩は何故か苦笑いをしている。どうしたんだろうか。
「どうしたんですか、その苦笑い。宇宙人にでも好かれましたか？」
どこの宇宙人が好くのかは分からないが冗談交じりに苦笑いの理由を聞くと照れくさそうに、気分だそうだ。なんとも御偉い身分ですことで。
「それよりさ、蒼汰」
「本題ですか？」
「俺はお前の茶番を流しただけなんだが……まぁ良い。今日入学式だよな？」
「先輩も入学式ですか？」
「どこの先輩だよ。俺はお前の1つ上で条咲学園の二年だぞ、おい」
「へぇ～、世も末ですね」
「どういう意味だ！？」
おっと怒りだしたぞ。僕は右手で携帯電話を天井へと向かせてその怒鳴り声をスルー。姉が来る心配性も含んだが姉は下で朝食最中だからな。
「もう、良い。本題行くから余計な口挟むんじゃねぇ～ぞ？」
「言葉づかい上手ければ僕のお嫁さんにしていることなのにな」
口挟むなとけん制された隙に口を挟むと相手は無言だ。どうした

ことやら……僕、調子乗ったのを反省してます。
「……お嫁さん……」
小さくそのような言葉が聞こえた。え、どうしたのやら。
「お嫁さんって冗談ですよ？」
「冗談かーーーーーー！！」
いや、まったくその通りですけど？
「お前の嫁、考えとく。さて本題だ」
右人差指をこちらへ向けて声音が最初は可愛らしく、後半、どこぞの島を守るおっさんの声がしたんだが。嫁って考えるものだっけ？　それと人に指差すんじゃありませんよ。
「どうぞ」
やむを得なく話を進行させようと返事で促して先輩はそれを紡いだ。

「そのだな……今日、一緒に行かないか？」
声音が一気に可愛らしいツインテ先輩を思わせるが現実は厳しい。そんな先輩の隙を突くように言葉を紡ぐ僕。
「ヴァルハラへ？」
「誰が天国行くって言った？！　この阿呆！！」
罵声を浴びたが毎度なのでもう慣れっこだい。首を傾げてよく考えてみると、そうだな。なんで僕はヴァルハラなんて言い出したのか自分で迷走してしまう。
「学園へ一緒に登校するんだよ！　この腐れビッチ！」
漫画のようにツインテは毛先が逆立って威嚇をしているように想像して見えて少し面白い、なんて言えないけど。
「分かりましたから落ち着いて下さいよ。どこ集合ですか？　やはりヴァルハラですか？」
「だからちげーって馬鹿！」
酷い先輩もいるもんだね。後輩を馬鹿呼ばわり。特殊性癖の人には好かれそうだな。

「もう……お前の家の下にいるから来てくれ……また後で——」
　電話の内容からして僕の家の玄関付近……姉に見つからなければ平気……いや古い縁からして大丈夫だと思うけど……僕の生命線が消えない内に無駄な死亡フラグには会いたくないものだ。

　姉は条咲学園を二年の時に中退した。今本来で言うと三年。理由は誰が聞いても答えてくれないとのことで僕は姉に聞かないまま、今日までやってきた。正直、弟身分、家族身分としては興味はあった。けど他人に触れてほしくない部分は幾らでもあってそう簡単に聞き出せるものではないんだ。誰にだってダークサイドな部分はあるんだから……。

　僕は携帯電話を胸ポケットへと仕舞い、荷物sを持ちあげて階段下の玄関まで持って行くがこれまた重労働。一階へ降りると姉と父と祖父母が待っていて、祖父母はハンカチで目を覆っていた。みんな……優しいな。
「蒼汰！　お嫁さんはなぁ、ニーソを履いている子で頼む！　爺の一生のお願いじゃ！」
「蒼汰！　お嫁さんはなぁ、男の娘でよろしく頼む！　婆の一生のお願いじゃ！」

「……誰がこんな家、帰ってくるか馬鹿ああああああああああああああああ！！」

　——一瞬にして裏切られた僕の気持ち、返してあげて下さい！
　玄関を勢いよく締めて、外に出てみると銀髪ツインテでしっかりと学園の制服を着こなして、軽荷物（スクールバック）だけを肩に通して持っていた先輩が居た。
「すいません、先輩。遅れて」
「蒼汰。俺の事はフルネームを答えてみろ」

「成瀬深月（なるせみづき）……？」
「なんでクエッション〜ン？！」
なんかハイテンションだなこの人。それに日差しは強いけど頬が赤く染まるまで熱くは無いと思うんだが。
「長い付き合いなんだし、深月（みづき）って呼べよ。俺だけお前の名前言うとか恥ずかしいじゃねぇ〜か」
そういう意味ね。
「深月……先輩？」
「先輩付けんな！」
「えぇ〜！」
理不尽なツインテ攻撃で僕の顔へとその髪から匂う仄かなシャンプーのような甘い香りでいろいろ刺激をされてしまう。ノックアウト寸前かもしれん。
「それより、時間良いのか？」
ツインテ攻撃が当たった頬をさすりながら腕時計へと目をやる。七時四八分。歩けば間に合うか間に合わないかだ。
「大丈夫ですよ」
「それなら良いけど」
ツインテ攻撃してくるけど結局は深月先輩は僕をちゃんと心配してくれて姉とは違う安心感がある。姉と言うのは本来深月先輩のようなぶっきら棒な……痛？！
「なんか恥ずかしかった……」
気付くと頬を抓られていて見事にその恥ずかしさは命中してましたよ。
「とりあえず立ち話もあれなんで歩きましょうか」
「そうだな」

他愛もない話で盛り上がっている内に例の心臓破りの坂は登りきっていて気付くとコンビニが目に入っていて深月先輩が「ちょっとなんか買う？」とのことで僕はそれに同意するように首を縦に振る

ことにした。

「いらっしゃいませ」

店員の明るめの挨拶に心が和むの普通だよな。緊張の面持ちでコンビニ入るのは強盗ぐらいだろうけど。

メロンパンとミルクティを買って僕は深月先輩に「朝食だけ買いたかったんで」とだけ言って買い物をして外へ先に出てることにした。

傘立ての脇に荷物を一旦降ろして、太陽へ向けて背伸びをするとあちこちの関節から聞こえる骨の音。学園まではあと歩きで2分。今の時刻は七時五九分。げっ、間に合わないじゃん！

急いで荷物を取ったが……僕の視界はいきなり、謎の真っ黒な世界へと変わって行ってしまったのだ……——

二話　誘拐犯

「アレ？　レーデル、意識を失わせるだけで良かったのよ？　何も殺すなんて……」
「ミユお嬢様、私はそんな茶番なことはせず……一突きです」
え？　あれ……おかしいな。深月先輩とコンビニに居たはず……。ちょっと待て。今、僕は死んだ扱いなのか？　そして、聞こえてくるのは女の子の声が二人分。
「レーデル、殺すのも良いけど……」
「死んでないですって！」

「あら、おはよう。”橘蒼汰君”」
「え？」
僕は突然と言われた自分の名前を見ず知らずの人間の口から出てきたことに驚き放心をしてしまった……。

――小神ミユ、１６歳で条咲学園高等部2年。
あの深月先輩と同学年で金持ちなのか、僕はリムジンでどうやら誘拐をされたらしい。
誰でも納得できないのがリムジンと誘拐であって誰も高級車に乗って誘拐されるなんて予知、出来ただろうが？　僕なら自信持って、予知出来ないと断言できるぞ。
「蒼汰君、だから蒼君か……黒髪好きだよ～」
勝手に誘拐して勝手にあだ名付けて勝手に僕の左腕へと手を回して抱き着いてきている。本来なら大喜びするところだが状況が状況だ。空いている右腕で苛立つ風に頭を掻く僕の悪い癖が出る。

「えっと、小神……」
「ミユ！」
心拍数上昇。耳元での大声は勘弁していただきたいが、かなり可愛い声での大声だから本能が許してしまうらしい……、僕の馬鹿、変態！　そっぽを向いて深呼吸をしてもう一度トライ。
「ミユ……小神ミユ！　君は一体何が目的なんだ！」
若干、探偵ドラマ風の探偵役の台詞を吐く僕。
「ミユ」
そんな僕の言葉を受け入れず、彼女は一方的に同じ言葉を繰り返すだけ。
「だから言いましたよ僕」
何かが根本的にズレているのか分からないが小神自体は小声で「乙女心分かって無いなぁ」とのことで。誘拐犯の気持ちよりは乙女心の方が分かってると思うだけど。
「ミユって呼んで！」
なるほど。小神の顔を覗きこむように横を向くと頬を膨らましてお怒りになっているご様子だ。今頃気付いたが耳の上でさくらんぼのリボンを彼女は掛けていてサイドポニテが両サイド二つある。いや、これをツインテと言うのだろうけど……何か違うような。小神の髪色は水色で、僕の第一印象は可愛い、けどこの子は誘拐犯、気分は複雑だ。
「ミユさん……」
「さん要らない！」
「ミユ……何が目的？」
年上にタメ口が日常茶飯事なのがいけないと思うけど相手の勢いでついついタメ口へと僕の口調が変化して行く。
小神は制服に身を包んでると言っても女性特有の強調が無くて……俗に言う貧乳。その貧乳さくらんぼ女は無い胸を張り「教えてほしい？」との一言。僕は気になるから聞いたのだが興味が無くなった。
「やっぱ良いわ。降ろしてくれ」

「貴様、ミユお嬢様にタメ口とは良い度胸だな？　あぁ？」
前の助手席から偉そうに聞こえてくるレーデルという赤髪でポニーテールのメイド？　執事？　さんの声が僕をけん制するが元はと言えばレーデルという訳の分からん似非女性執事が僕を誘拐して事が発展したんじゃないか？　という疑問。
「レーデル、折角の材料なんだからもっと丁寧に扱いなさい。分かりました？」
見た目は幼くて、ただの誘拐趣味というか悪趣味を持っている変態女だと思ったけど……やはりそんなことは……。
「もう一度言うわ。蒼君は〟材料〟なのよ？　大事な事だから二度言ったわ」
無かったよ、馬鹿野郎。
僕はどん底へと落とされた気分で〟材料〟とは何のことかと試行錯誤してみたが見つからない。きっと今日ホームパーティで闇鍋で僕が食材に……無い無い。レーデルさんは渋々と返事をしている。僕にだってそのぐらいの態度をしてくれたって良いじゃないかよ、もう。
「そのさ……小神」
パチンッ！　唐突だった。鋭い音で僕の頭はレーデルさん持参のおもちゃの拳銃からビービー弾をおでこへ命中させられて悶絶をする。拍手をしてハイタッチをする二人。僕が何か悪いことしたっけ？！
「ミユって言ったのに……馬鹿。レーデル、ロープとガムテープ」
「ミユお嬢様、学校の方は宜しいのですか？」
ナイスレーデルさん。さすが殺人スナイパー……あだ名決定だろこれ。
小神はどうやらｓｉｎｋｉｎｇ　ｔｈｙｍｅへと入ったようだ。腕と足を組んでいるが色気が足りないとか言うと、またビービー弾が飛んでくるので控えておこう。そして、そんなに学校へ行くことって難しかったっけ？

「ねぇ、蒼君」
レーデルさんに今度は額貫かれそうなので渋々、「はい」と素直におでこを押さえながら返事するとそのまま話が進んでくれるそうだ。
「一緒に登校してくれないかな？」
悶絶する僕を尻目に背中へと無い胸を押しつけられて興奮するわけでもなく平静のままと首を縦に振り、レーデルさんが「感想は？」と聞いてくる。何の感想だろうか……。
「無かったです……痛、痛痛っ！！」
胸の話かと思ったのは正解だったらしい……おもちゃの拳銃をレーデルさんと小神が死んだ魚の目でフルスロット使う気満々で連発をしてきて僕は顔を伏せて背中でその攻撃を受けるのであった。

――「いってらっしゃいませ、お嬢様……とドM様」
右手を左胸に当てて深くお辞儀をする燕尾服を来たレーデルさん。というか、誰がドMだ！　というクレームはさて置き、あのリムジンの中で一五分話していたそうだ。時刻を見ると八時一四分。改めて思うが気を失ってからの復帰、僕早いね。さすがある意味鍛え上げられたものだ……姉に。
着いた場所は条咲学園で荷物はどうやら何通もメールと電話をしてきた深月先輩が持っているらしく、昼間に食堂で待っていてくれるらしい。さすがってところだな。
「じゃあ、行きますか」
顔を上げてそう合図を小神へと送る言葉を言った傍から僕は思考回路がフリーズしてしまった。
「「「「おはようございます、ミユお嬢様と……」」」」
「蒼君よ」

「「「「蒼君様」」」」

変な違和感十割。あぁ、この感情は変な違和感というだけで構成されていたのか。それどころではないのは重々承知だがたまには現実と目をそらしたくなるのは僕だけだろうか？

僕の目の前は条咲学園だ。それは御存じの通りだが校門から2年下駄箱へと繋がるようにメイドさんが異常な数で出迎えてくれている……ざっと見、１００人手前だ。命名しよう、メイドさんロードと。それにしても一人一人が違う服装と思うのは僕だけでは無いはずだ。周りに登校生徒がいるにも関わらずこの様だ。他の生徒も小神へと軽く会釈を交わしてそれに対して手を振り応対。まるで金持ちだ……いや、金持ち確定。学園は許すのが謎だと思うが。

「どれか一人、抱きたい？」

僕の鼻から鼻血が勢いよく噴射する手前で鼻を押さえる。どうやらレーデルさんが僕の耳元で囁いたらしく足早に「あとは頼んだぞ、蒼汰」と言って助手席に乗り、運転手ドライバーの伯父さんへと声を掛けて後ろにあったリムジンは走り去って言った。慌ただしいにもほどがあるって。

どれか一人、抱きたいって言えば……小神かなって僕の馬鹿。さすが変態男子高校生って思われちゃうでしょ！

そんな下心と戦闘する中、小神が僕の腕を取り、腕組をして歩き出す。正直、恥ずかしくて死んでしまいそうだ。でもここで逃げだすのも……。周りから殺意の眼差しとかが……怖いんだがミユがそれを察してウィンクをして対応……どうやら僕を誘拐した誘拐犯は笑顔とさくらんぼがトレードマークの愛らしい人と似非女性執事でした。

三話　華麗なるチキン？

あぁ、空が紅い……こんなにも空って紅かったっけ？　――「ちげーよ！」

目をパッと開けて、気付くと保健室のベットの上で、天井が赤いのではなくて僕の鼻血が散乱していたせいで赤く感じたようだ。今までのことを走馬灯のように思い出してみる……いや、イライラとかが入り混じって良く思い出せない、間違った、思い出したくない。嫌だよ、高校の入学式初日から誘拐されて遅刻しましたなんて。ましてや、お金持ちのお嬢様に誘拐されてその似非女性執事とそのお嬢様にビービー弾打たれて、挙句の果てにその似非女性執事には変態扱いに……って言えるわけがねぇ！！

「起きた？！　一生死んだままかと思ったよ！！」

いや、気分的には死にたかった感ＭＡＸだからね。上半身を起こして、声の主を探すとあのさくらんぼ女がベットの横に居て椅子にちょこんと座っている。

「何か用？」

無愛想な面持ちで聞くと相手も唇を尖がらして「相変わらずだね」とのこと。相変わらずって僕は誘拐された時しか貴女と会っていませんよね、って話。小神が看病してくれたらなぁ……とか考えると鼻血が滝のように出て行きそうなので目を瞑り瞑想。迷走でもあってる気がするんだがな。

「…………」

静かな保健室に沈黙が訪れる……。目を開くとそこには小神が頬を赤らめて目を瞑り、唇を差し出すように仕向けている。いや、待って。なんかいろいろ僕、お婿さんに行けなくなっちゃう気がするよ！

「ｔｈｙｍｅ！　誰もキスとか求めてないからねっ！」

「えぇ～？！　キスか瞑想かと迷ってたんだけど……蒼君のちょっとえっちな脳内だとこっちが適切じゃない？」
自分の唇を右人差指でを触れてウィンクしてくるがそのようなハードなものは誰も要求してないよ。いや……こういう面で僕はチキン……ですよ。
「酷いですよ先輩……ってなんでまたおもちゃの拳銃？！」
制服の胸元からおもちゃの拳銃を素早く取り出して僕のおでこへと銃口を向ける。待って！　それ結構痛いって男の子なら誰でも分かることとなんだ、えへへっ。

――彼女は容赦という言葉は訊いたことが無かったようだ　b（た）
y橘蒼汰（ちばなそうた）

「名前呼んでくれなかったらこれで撃てって、レーデルが言ってた……けどって伸びちゃった？」
「あぅ……あぅ……」
チーン、それが僕の効果音に使われる日が来るとは。おでこを押さえて悶絶状態で布団をかぶり蹲（うずくま）っている中、保健室のドアが開き布団の中へと誰かがって、小神しか入ってくる奴はいない。顔はもう数？の距離であって、心臓の心拍数は上昇したままで止まらない。それと……どことなく香るこの匂い……殺人匂だ！

「ちょ、ミユ？！」
「静かに……」
ニヤニヤした顔で右人差し指を口に持って気して如何にも静かにしてくださいの合図。いや、言葉でも言っているが。声を量を控えめに「出てください」と保健室の床へと強制送還させようと押すも微動だにしない。むしろ、吐息が本格的に近づいてくる勢いだ。

「お～い、蒼汰？　大丈夫か？」
何の気も知らず深月先輩は、のこのことこちらへと足を運んでくる。一歩一歩が異常に大きく聞こえて頬を染めて蒸気のように茹って行く。どうやらしでかした当本人も暗い中で頬を異常に赤く染めて息が荒い……おっさんかミユは？

「開けるぞ？」
とうとうこちらへとやってくる深月先輩。白い純白のカーテンがひらひらと舞いながら開けられる……。一秒一秒が愛おしく感じてしまう……お願いだからそのままUターンして下さいって！
心の中の抵抗空しく「蒼汰？」という疑問形で何かを問われる。
「……もしかして、この声って……ナッチー？」
急に声のトーンが落ちてこちらを凝視するミユ。ナッチーとはきっと成瀬深月から来ていると思い込み、僕は声に出ず、首を傾げながら頷く。ミユは凄く悪魔の笑みを浮かべて腕を引っ張り、ミユ本人が下で覆いかぶさるようになった。ミユの脚の間に僕の脚が挟まり、外から見ればそれは『子作り』に何も変わらなくて……。ニヤニヤと本当に性質の悪さを露呈する。心臓は、はち切れそうなぐらい鼓動は鳴り響き、その上にミユの手が重なる。
「ナッチー……どう反応するかな？　えへへ」
どう反応するも男としての反応する部分をどう沈めるかでいっぱい……って匂いがっ！

「そんなに丸まって熱くないのか？」
「……んっ、だ、大丈夫だよ！」
顔を反らして答えるがあっちはどうやら疑っているようにしか聞こえない。それとミユが僕の頬を撫でまわしていて反応する部分が反応してしまいそうで……。
「そ、そのだな……俺が捲ってやる！」

「「え!?」」ついついミユと声が重なり、「ん?」との言葉の返しが……。

「おい、蒼汰」
やけに声のトーンが下がるが今頃の女子高校生は異性相手にそれが流行っているのか? それとも深月先輩が僕を男として観ていないとかも大分、事故だが。変に試行錯誤して返事をし忘れて「聞いてるのか?」との声が……。
「あ、はい……」
聞いてますとも!

「事情は訊かないが……ここに『水色のクマの携帯ストラップ』が分離されているぞ? しょうがない、俺が付け直してあげるから携帯電話貸せ」
なんだそんなことか。確かにそれは僕のだ。14歳の誕生日プレゼントに深月先輩から貰ったものでなんだかんだで色気の無い僕の携帯電話のストラップとして付けていた奴だ。
「ありがとう深月先輩」
「……?」
胸ポケットの携帯電話を取り出すまでに上半身を起き上がらせないとミユに触れてしまうのでいったん離れて取り出すがミユはどうやら謎めいた表情でこちらを再び凝視をしている。それは関係なしに深月先輩の恩恵に手を布団の外へと出した刹那――「頂き」
あれ? これってもしかして……そのもしかしてであったのだ。
「さぁ、醜態を晒せ!!」
布団を思いっきり捲らされた僕は態勢を崩してミユの両手首を両手で押さえて唇と唇が合わさってしまった……。まるでこれじゃ……僕が犯人?!

「「んっ!?」」
上手く合わさってしまった僕とミユ。そこに深月先輩の怒号が鳴り響くのだ……。
「蒼汰ああああああ!!!!」

――僕の人生が終了を告げるかのように予鈴が虚しく保健室へと鳴り響いたのであった。

「どうした橘?」
Ｂ組と宣告された僕は腫れあがった顔の状態で入ると担任に心配の眼差しで見つめられた。
「いえ、廊下走っていてこけました」
見苦しい言いわけにちょくちょく反応するクラスメイト。席を案内されて教室の中央の列の三列目の前から三番目の席へと着席をしたのだった。さすが、僕の馬鹿。

「蒼汰の馬鹿、蒼汰の馬鹿、蒼汰の馬鹿」
――私の隣で蒼君を罵倒というか呪文のように唱えているナッチーこと成瀬深月はカンカンに怒っている。
私、小神(こがみ)ミユはその可愛らしく、乙女のような表情に頬を緩ましして見つめてしまう。２年は体育館の椅子の片づけだけが本日のメインで「男は力仕事」ということで切り上げて、今は人数の少ない学園の食堂に居る。本来、こっちは教職員専用食堂と言っても過言ではないが学生が使っても何もメリットもデメリットも無いので男子寮、女子寮である食堂を使ってもどっちでも良いわけである。

真っ正面に座るナッチーは何か遣る瀬無い気持ちで「あの下僕め」などと呟いている。そういえば私も下僕が……ってあの子は私専用執事だったわね。

一つ言うと、私は猫かぶりかもしれない。あの子や私の事を知っている人の前では口調が崩れてしまう……蒼君の時もそうだった……それにキスもされた……。友人は私の前でそれについて悩んでいる。余計な罪悪感に胃がねじれる思い……。でもスリル感はあった。病弱だったあの頃の私とは違うって自分を信じてるから楽しくなかった頃と比べて楽しもうと思う。

あの子には悪いけど私は自由にこの学園でやらせてもらう。私は、過去の私とは違うんだ。勇者伝説がこの学園にあるように私には『橘蒼汰』が居るから、もう心配は無い。蒼君はあの人の――

「聞いてますか、キスされちゃったミユさ〜ん？」

「あ、え〜っと胡麻アイスって北海道にあるって聞いたことあるよ！」

「どんな話？！　俺はあの変態（蒼汰）を教室から拾ってくるから、この荷物見ておいて欲しいんだけど頼めるか？」

「うん、いってらっしゃい〜」

あれ？　私嫌味言われた？　首を傾げる私とそれを見て苦笑いしているナッチー。ナッチーに私……嫌われてたりするのかな……。う〜んと分からない。

銀髪のツインテを揺らして食堂を出て行く背中を見送った私。その頼まれた荷物を見るとエナメルやらボストンバッグやら置いてあり、一人で持ってきたところに思わず感心してしまう……。

「力持ちだなぁ……」

そういえばナッチーが言った『水色のクマの携帯ストラップ』ってあの時、相談を受けた物だった。蒼君はあの時のナッチーが大好きだった人だったんだ……。恋って楽しいのかな？　私は蒼君と近くに居て心臓が高鳴った……それにキスも……思い出すだけで頬が

熱くなってどうにかなりそうで頭の中が蒼君だらけだよ。

「蒼君って……面白い」

天井を見上げて胸元からおもちゃの拳銃を取り出して、一発、天井へと放つ。そのまま落下してきておでこを擦り何故か笑顔になってしまう私。そしてとあることを思い出して自己嫌悪が発生する。

「胸……ナッチーは私よりツーカップ上ぐらいあるしなぁ……」

素直に自分の微笑にある胸を見て「蒼君は……大きい方が良いのかな？」などと羞恥の発言と自分で思い、両手で口を塞ぎ頬が再び熱くなってくる……私の馬鹿！

テーブルに突っ伏す私はショートカットの頭を両手で掻き乱して思考回路が停止するのであった——

『ミユお嬢様になんたる仕打ちを！！』

「許して下さいレーデルさん！　そ、それだけは！」

『ビービー弾をそんなに喰らいたいか？　それとも今までの罪を懺悔するか？　あ？』

「お嬢様にキスしか……僕は悪いことはしていません……本当です！」

『お嬢様に使える身として言うが、お前を私の『華麗なるチキン』として雇ってやる、感謝しろ』

「か、華麗なるチキン？」

――グゥ〜、腹の音で目を覚ますとすぐそばで担任が近くに立っていて僕を起こしていたそうだ。は、腹の音が鳴ったのを笑ったのかクラスメイトは何故かツボに入って笑いが止まらない人が多数。酷く嫌な汗と恥ずかしさが入り混じる。担任の顔を良く凝視すると女教師であって釣り眼鏡を掛けた２０代の若い方の先生で……新人と見た。

「橘君、貴方……許して下さいとかお嬢様とか華麗なるチキンとか言ってたけど……良い夢見れた？」

寝言が聞かれてた！　慌ててヨダレを裾で拭き取り、立ち上がる僕。寝言でクラスメイトは笑っていたのか……騙された畜生。担任はどうやら引いた面持ちで眼鏡のレンズを片手で持ち、ずり下がった分、掛けなおして苦笑いをしている。絶対馬鹿生徒扱いされるでしょ……今後。

「大丈夫です、きっと」

どうやら僕の余計なひと言で困り顔をしだした……どうしたことやら。

再び保健室と新手の苛めのように精神科の病院をやけに推奨してくる先生を避けきって本日の時間割が終了をして午後まで自由行動で一三時から寮の部屋割の発表を男子寮と女子寮で行うらしい。

「あ、深月先輩」

「何？」

教室を出てすぐドアの手前に潜んで、仁王立ちの深月先輩に話しかけるがどうも不機嫌だ。悪い食べ物でも食べたのか？

「何って食堂じゃ……」

「お前、場所知らないのにどうやって来る気だったんだ？」

ため息を深くついて首を左右に振って顔を上げて睨みつけてきた。理不尽な怒りが飛んできそうだな。

「そ、そうですよね……」
なんとも絡みにくい……ここまで不機嫌だと深月先輩って感じじゃない気がする。
「ありがとうぐらい言え、馬鹿」
「ちょ、痛！　あ、ああありがとうございま、痛、痛っ！」
その場で一回転を（高速で）する深月先輩を目の前に再びツインテ攻撃を両目に喰らい廊下に虚しく僕の悲鳴が響く。なんとも横暴な性格なんだ……不機嫌な理由は僕にあることは分かったが……キスで怒るのか？
「キ、キ、キスで怒ってるんですか先輩？」
「お前死ね！　何回でも良いから死ね！　輪廻転生してくんな！」
うぐっ、僕に深月先輩は生き返るなって言うの？！　そんなことより、集中しているつもりがツインテ攻撃に僕は耐え切れずしゃがんで交す。すかさず隙を狙った深月先輩の蹴りが僕の身体の中心の急所へと鋭く入って意識が一気に吹き飛ぶのであった。次も絶対人間に生まれ変わって――華麗なるチキンさんが人間界からログアウトしました。

四話　勇者なチキン野郎

「ミルクティとメロンパン食べたけど問題、無いよな？」
条咲学園の廊下を僕は歩いている。その隣に凄く不機嫌な表情を顔で見事に出し切っている僕の朝食泥棒さんという名の深月先輩は銀髪ツインテを揺らして僕の歩幅と同じに歩いている。
渋々なのか僕は適当に「そうですか」と相槌を打ち、何か言いたげな口の動きをする深月先輩は……『ば』の口の開き方だったが、なるほど『馬刺しが食べたい』のか。
「お前、俺の馬にでもなる気か？」
「いや馬になっても良い事無いですし」
「おし、馬になれ」
無理やりだ！　この人無理やりすぎる！　現実で『馬刺し』なんて良くないよ！　いきなり学ランの襟元を両手で鷲掴みにされた僕は必死に首を横に振り命乞い。ヘタレとか関係なしにこれは脅迫の一種だろ。
無事に降ろしてもらった、もとい落としてもらった僕は廊下に尻もちをついて深月先輩を見上げると……凄いアングッ――「どこ見てるんだ！」
スカートを抑えたまま頬を赤く染めた深月先輩は片足を後ろへ下げて勢いよく前へ持ちだして僕の顔面へとクリーンヒットをしたのだ。

「ど、どうしたの？！」
――食堂へとナッチーに腕組みで運ばれてきた彼はまるで干物のようであって生気が……頬が赤いから男の子としての反応はどうやらあるようで、だが次第に青く薄らと染まり、の繰り返しをしている。
「ちょっと聞いてくれよ。蒼汰の奴、俺のスカートの中見てニヤニ

ヤしてるんだぞ！」
テーブルに座り蒼君の腕をそっと離して頬杖をついて、空いている手で頬を掻いている。とても……女の子らしいってナッチーに言われるけど、ナッチーが私には一番女の子らしく見えるよ……。
「そういうお年頃だよ、きっと」

「――でだ、お前。琴音さんの弟なんだから条咲学園（ここ）の『勇者伝説』の噂知ってるだろ？」
「唐突ですね。……、睨みつけないでくださいって。噂って言うか僕的には”デマ”だと思いますよ」
　場所は女子寮と男子寮を繋ぐ学園本館2階から来る渡り廊下の一角の休憩室という小部屋。ここしか女子寮と男子寮に行く道は無くて男子寮と女子寮の1階は主に食堂。下駄箱はあるが外へ行くドアは夏季休業と冬季休業と春季休業だけしか空いておらず、なんとも不便なんだろうと、システムを知った時は……今だけど溜息が洩れた。
今いる小部屋は白い壁紙でなんの施しも無い。目の前の深月先輩は相変わらずスカートを抑えて余計な情報を僕の耳へと入れてくる。ちなみにミユは自動販売機の隣に設置してある植木鉢との間に体育座りでコンポタージュの温かい缶を両手で握っている……僕の奢りです、はい。それと僕の荷物は何も言わずにミユの尻の下敷きに……僕の荷物、僕と代われ！
「”デマ”って言ってもそりゃあ噂だからそう思う人間が居て、不思議ではないけどな」
　否定はしないのは当然論を口にする深月先輩。苦笑いで缶のアイスミルクティを一気飲みして缶専用と書かれているところへと投了。深月先輩は再び僕へと視線の戻して「でも可能性って知ってるか？」とのこと。

可能性、それは何らかの事象が発生しうるか、あるいは故意にに発生させることが可能かということ。

「要するにその可能性の噂を信じろってことですか？」
珍しく首を横に振る深月先輩。いや、我儘だからって殆ど他人の言うことに首を縦に振るとは思わなかったが、なんかイメージが違うようでそのようで。
「別に信じろなんて強制をするとかどこの信教だって話さ。俺が言いたいのは『勇者伝説探求部』へ入らないか？　ってことなんだが、どうだ？」
ウィンクをして誘うとも無駄だ。そもそもどんな部だよ、どうせ同好会とかだろう。僕はそんなデマに付き合っていられるほど、優しくは……無いんだ。
「悪いけど、僕にそんな”未練”も無いんです……」
ちょこ、っと恥ずかしそうな顔のまま様子を窺うようにミユの顔が出てくる。
「私、練乳はあるよ？」
と思いきや、再び顔を引っ込めた。セーラー服のスカートのポケットから練乳が出てきたージとかそんな恥ずかしい事は……」とか聞こえたが今の僕にはそんな囁き……本能が嬉しがったよ畜生。緊張してたのか、また溜息が出てきて顔を上げて深月先輩の顔を見上げる。後から「口の中に出して、イメ
「未練が有るまいか無かろうかどっちでも良いんだよ。今欲しいのは新入生にして超高校生級の大型新人君が欲しいのさ！　さぁ、一緒に勇者伝説探求部へ！」
厚かましい誘い、そしてなんとも訳の分からないテンション。
「知りませんよってなんで深月先輩がその拳銃を！　小神をわぁっ！」
——パキューン、そんな音は僕の脳内変換効果音で実際「ドッ」。小部屋で二丁拳銃のままビービー弾から逃げる僕の姿は後々、生徒

指導部の先生にこう言い触らされるのだった。

『勇者なチキン野郎』って――

一話　事件発生？

季節は夏。五歳から始めて、小学一年になった今年、僕の通う横尾剣道道場に女の子の新入生がやってきた。黒髪が腰まで綺麗に線を描くように……大和撫子とでも言わされざる負えない容姿。何もかもが”完璧”な彼女がやってきたのだった。

当然一年のブランクがある僕にとっては何よりも嬉しくて、悲しくて……実力の無い僕にどうやって彼女に勝てるのかなどは考えてみるも、馬鹿馬鹿しくなってきた。

「……よろしくね、橘君」

ハッ、と我に返り僕は彼女の差しだすその手を優しく握り、ぎこちない笑みで「おう」と応答。照れ隠しのように僕は頬を指先で掻く癖を彼女は見て笑っている、これが彼女との出会いであった。

彼女の名前は秋山ノビル。何故か訳あってアリスと呼ばないと返事を返してくれないのだ。

アリスに興味を抱き始めた僕は稽古の無い日も毎日道場へと通い、いつもアリスの練習をしている姿を見ていたんだ。そんなある日だった――

「この道場は女子禁制ってどういうことですか先輩！」

稽古が始まる三十分前に道場へ入ろうといつもより早めに来てみるとアリスの叫び声が道場へと響いた。何事かと駆け足で中へ入ると涙目で上級生の男子に訴える姿がしっかりと見受けられた。

「女子禁制だからだよ。第一女子が剣道なんて、男に勝てない癖によ」

何かが切れたような音がした……。しゃがみ込んだアリス。そこから一瞬の出来事のようにアリスの左腕がその上級生の男子の鳩尾

へと綺麗に入って行き、「ダメだよアリス！」と叫んだもの遅く、上級生男子を殴り飛ばしたのだった――

「橘君、起きないとあの部長に怒られますよ？」
「――んっ」
目を微かに開けて気付くと目の前に……男が……思考回路が五秒フリーズした。色素薄めの茶髪男なのだが何か清楚感がある……。え？　ベーコンレタスな展開？！　布団を足でめくり上げて勢いよく腹に力を入れて起き上がるも二段ベットの特徴として一階にはベタな事故を要求する天井と言う物があり、再び枕へと頭を落とす。
「痛っ？！」

頭部を押さえて渋々と条咲学園の体育着でベットから出てくると相部屋の岩槻(いわつき)葉也(ようや)が相変わらずな笑みで「大丈夫ですか？」なんて言っているが内心「ざまぁー」だろうな。
いつものような「心配ありがと」と相槌を打つが彼はなにやらそれが気に食わないのか部屋の片隅にある葉也の書棚から毎回、『人間心理』という謎の本を開いて頷きながら熟読し始める。

この学園へと入学して六日が立ち、そろそろ葉也との相部屋も慣れてきた頃。相部屋はランダムに組まされていき、同じクラスメイトというのは珍しいぐらいと担任談。条咲学園へ今年入学した生徒は二一〇人。一クラス三〇人前後なために確かに割合的には珍しい。
それと幼い頃の自分の夢を見るのも。

「邪魔するぞ。入って良いか？」
最後の一文が僕には理解出来なかった。言う前に扉を開き、一歩二歩と部屋に侵入してから言うのはどうかと。入ってきたのは深月（みづき）先輩で今日は僕と同じ体育着。勿論、透けない。
「入ってるじゃないですか深月先輩」
「堅い事は気にするな……ってなんでお前は俺から何かを守ろうと下半身を抑えるんだ！　破廉恥だ馬鹿！」
　堅い事は気にするなって言ったからなのに逆ギレですか、畜生。僕はそのまま「着替えるんで出てって下さい」と用件を訊かずに外へと無理やり追い出したのだ。ドア越しから聞こえてくる「小さい頃から見てるんだぞ、隠す必要あるのか？」という男を理解していない先輩声。いろいろまずいってものがあるんだけどな……。本当、あの人は自分で言う分には恥ずかしがるのにな。
今と昔を比べたら比にもならないって誰かが言ってなかったけな。そう考えると僕の小さい頃の夢ってまだ、強制的に入部した『勇者伝説探求部』でも叶えられたりするのかな……。小さく胸の奥底で呟く僕はどうやら世迷言のようなことを呟いていた。
「もう、良い。とりあえず学園本館三階の図書館集合な」
　思わずビックリして空返事で終わってしまった。三階の図書館……三階の図書館……。

「休館日……って」
　学園本館の地図を頼りに三階へとやってきて辿りついたは良いものの、休館日だった。ちなみに葉也は先に深月先輩と出て行った。そもそも日曜日休館日って深月先輩やミユは知っているはずなのに……どういうことだ？　首を傾げる僕と風で優しく吹かれる地図。そんなどうでも良いシチュエーションの中、背後に何かを感じて後ろを勢いよく振り向くと腕に何かが当たる……。

「うぉっわ！」

情けない声とともに腕が当たった本人からのビービー弾の連射を頭に浴びる僕。え！？　ビービー弾のお化け？！　という訳でもなく拳銃の反対側の空いた手で当たったと思われる脳天をさするミユが居た。お化けじゃなかったが、ある意味怖い人物であった。

「痛いなぁ蒼君！　驚くときは言ってよ。構えちゃって失敗したじゃん……もう」

入学式の当日の時の深月先輩のような不機嫌な面構えをするミユ。驚くとき言えって言われて言える奴がどこに居るのだか。それより何を失敗したのやら。ミユの格好はメイド服で……いわば一種の萌えであって異論は認めない。

「ミユ、深月先輩に言われて来たんだよな？」

「馬鹿だな蒼君は（メイド服をスルーしたと言う意味で）。一応私も部員なんだよ」

どうやら六日前の『蒼汰が副部長決定なっ！』という深月先輩の発言に根を持っていたとは。

「そ、そうか。本当にここであってるのか？」

聞くまでもないだろって顔でミユはその休館日と札を捲り上げて中を覗き、図書館のドアを開けて手招きをしてくる。やむを得なく図書館へと入って行く僕。右手側に教室と同じ黒板が有りカンウターがあるとかで翳せば一〇冊が最高で借りれるとのこと。置いてあるのは大体基礎学から最近の若者向け雑誌などでこれまたごく普通の高校の設備だ。違うと言えば左手側に壮大に広がる横長さ。書棚はこのカウンターからでは数えきれない程あり、一番奥にはテーブルが設置されている。図書館の大きさをざっと言うとどこの高校にでもある教室、四つ分の広さ。

図書館の奥へと歩き、テーブルの椅子に座って、がに股状態で携帯電話を片手操作する深月先輩と『人間心理』を片手に座らず反対側

の手で逆立ちをして上半身裸で読んでいる葉也……一変変わった奴だけど本当に良い奴なんだ……きっと。

頭に手を当ててため息が出る光景に遭遇したのは過ちだと思う。

「岩槻君、服来て！」と誘拐された以来、口調が激変しているミユが僕の後ろで必死に叫んでいる。男性耐性が無いのか有るのか分からないがその場は『勇者伝説探求部』の部長を務める深月先輩に「服着ろよ」との男性耐性の強いお発言。男の僕でも言いはしないと思うぞ。

携帯電話をポケットへと終い「四人揃ったし始めるか」との合図で僕とミユはなんとも言い難い雰囲気でテーブルにある椅子へと腰を掛けるのであった。

「実は今回、『勇者伝説探求部』のストーカーが現れた件何だが……なんでお前ら顔面硬直してるんだ？」

何度聞きなおそうとも同じ答えだと分かっていても挙手をして「もう一度お願いします」と受け入れる準備をするように深く息を吐いて吸ってを繰り返して深呼吸をする。

呆れた表情を表に出しきった深月先輩の表情が妙に刺さるが気にしないでおこう。

「実は今回、ストーカーが顔面硬直した」

端折った！　物凄い所で端折ったよこの人！　別に同じセリフを繰り返せとは……言ったように見受けられるけど違うって。どんな端折り方だよ。

「端折り過ぎです」

との注意を払い已むを得なく先程の深月先輩の言葉を真摯に受け止める。

ストーカーってどんなストーカーだろう……（以下蒼汰妄想）。

「ご主人様にご奉仕するために追いかけてきちゃった、えへっ（ミユ）」

「俺の馬になってもらうために追いかけてきちゃった、アハハハ」

「後者は無い無い」

思わず妄想の結果論が口に出てしまい焦るがどうやら聞こえていなかったようだ。隣には春に似合わないメイド服を来て、スカートの裾が短かったのかスカートを両手で押さえてソワソワするミユ。その仕草だけで男は悩殺ものだよ、けしからん。

「その……ストーカー事件ってことですか？」

笑顔の裏にはきっと何かがある同級生の葉也は動揺しているのかしていないのか相変わらずの笑顔……何か違和感を感じたと思ったらちゃんと目を見て話しているではないか。進歩って奴なのか？それとも動揺……。あ、テーブルに置いてる右手が微動だにしているではないか、動揺か。

「それしかないだろ阿呆」

容赦ない深月先輩の罵倒もどうかと思うが今のは愚問だよな。

「お前ら一年の初仕事だ。ミユを守ってやれ」

右人差指を平然と僕に突き立てる深月先輩……。

「「「……え？」」」

と、驚く僕らの心と考えが一つになった気がする。なんとストーカー被害者はミユであって最初に言っていた深月先輩のは嘘で……ってアレ？！　なんか激しく端折られた気がする！

二話　馬鹿なメイドとチキンな執事。

「ということでね……岩槻君がね……守ってもらうならチキンな蒼君が良いって……言うからね、たたた、た、頼んでみようと思います！」

日曜日に朝起きを葉也に要求されて、深月先輩に部活の招集、挙句の果てにはミユを守れと言われて渋々承諾をして……一人だけで居た部屋のドア越しにて、今は会話中。誰がチキンだよ！

「だったら"チキンな僕"なんかより葉也で良いじゃん」

「えっとね……私の横に今、ナッチーが居てね……」

「大丈夫！　僕が守りますから！」

慌てて勢いよくドアを開けるとそこには図書館のときと同じメイド服姿で体育座りをしたミユが居てあの悪魔はいなかったようで……騙された。

「よろしくね、蒼君！」

勢いよく起き上がって僕の首へと両腕を回して飛び付いてくるミユ。僕は照れ隠しのようにミユを剥がしてから頬を右手で掻くと何を思ったのかミユは頬を染めて挙動不審になり勝手に部屋の中に入り僕のベットへと隠れて行ってしまった。あぁー何してんだ僕は。

「——お、男の子ってベット下に……幼い女の子のえっちな本とかあるんだよね？」

偏見なご意見だ。それに付け加えて勝手にベットの中から下を覗くのはどうかと思うんだが。案外部屋は広くて例えるなら教室半分はあると思うんだが感覚は人それぞれだな。

「無いよ。ところでミユ」

「今は心も体もメイドなんよ！」

「知らんわ。……分かったから色気の無い胸から拳銃取り出すの辞

めてくれ！」
　さすがにビービー弾浴びたら精神的ダメージを請け負う気がするからな。
「色気の無いって……やっぱり乙女心も何も理解してないよね蒼君って」
「？」
　何を困ってるのか苦笑いをして最後の方の言葉が聞こえなかったようだが色気の無いのはしょうがないかと……生まれつきって奴。僕だって生まれつき……勇者になりたかった訳じゃないのに……。
「そういえばミユ。この学園にある噂の勇者伝説ってどんな噂なの？」
「唐突だね……別にいいけど。伝説と言っても都市伝説みたいなものだよ？」
　ベットの中で鼻から下を布団で隠しているミユの少し手前に椅子を置き聞く姿勢を取る僕。正直、女の子に自分の布団を包まれるのは……ちょっと恥ずかしいがそれどころじゃないか。
「一応……〝勇者伝説探求部〟の一員だし、聞き損ってことでもないでしょ」
「確かにそれは正解な選択肢だね。じゃあこの学園の勇者伝説を話すね……電気消してカーテン締めて」
「お、おう」
　電気を消してカーテンを指示通り締める僕だが……これは怖い話するときの雰囲気とかと間違ってないか？　そんな疑問はお構いなしにミユのお話が始まったのだった。
「退魔の剣って言った方が早いかな？」
「語らないで疑問形で説明するの？」
「いやいや、語るものではないよ。受け継がれるものだよ！」
「同じだよ！」

意味が全く同じと言うことを理解していないミユは知らなかった恥ずかしさなのか布団の中へと籠り「蒼君の馬鹿」と呟いているが僕は何も悪いことしてないよ。椅子から平然とした態度でミユの動きを監視するが「良い匂いするね！」とはしゃいでいる。勇者伝説は何処(いずこ)へ。

「匂いなんて誰にでもあるからね」

「男の人の匂い……始めてなんだ、えへへ」

妙に恥ずかしさが匂いの事より勝って顔が暖かくなる僕……。

「良いですから続きをお願いします！」

「しょうがないなぁ」

照れ隠しをこの暗い部屋で行う意味ってことだが……顔を伏せてしまう。

「勇者伝説は本来の形はそのさっき言った退魔の剣を持った斬新な勇者の伝説なんだよ」

「確かに斬新だな。それでどんな伝説を作ったの？」

「その伝説を作った人は『イチハタ』って人。その人は最初平民だったの。毎朝のように通う悪魔の集まりやすいって悪評がある山へ登ってね、襲われたの……ガァォ！」

「そこまではまるで昔話ですね。最後の方だけですが舌切雀の劣化版のような感じですね」

「驚いても良いのに……蒼君の馬鹿」

「はいはい。ところで続きを」

「嫌だ。蒼君が驚いてくれないと！」

「どんなだよ……分かった驚く。ウォォォォ！」

「おでこから転んでくれないと嫌！」

「どこの芸人？！」

ガチャ――まるで部屋のドアが開いたようで……そのままの表現で合っていた。

「蒼君！　誰か来たけど……先生だったら厄介だから布団の中に来て！」
「嫌ですよ！　そもそもなんで厄介なんですか？」
「男女接触禁止って学園の……」
「布団の中へ入った方が厄介ですよ！」
「良いから……来い」
「あ、ハイ」
拳銃を額へと目標に構えるミユ……そして従う哀れな僕。布団の中へ急いで潜りなるべくミユに身体がくっつかないように外側へと身体を向ける。だが……背中に思いっきり抱き着いてくるミユ。
「ちょ、ちょっと」
小声で声を掛けるが応答なく強く握りしめてくる一方……待てよ、僕。今日の朝言われた……ストーカー犯なのかもしれない。僕はベットから身を強引に出して開き掛けてあるドアへと視線を送り、一歩一歩へと足を進めて行く。ミユに至っては布団へと包まってある意味正しい処置をしている。
「私を守るって言ったんだから……頑張ってよチキン執事！」
「わ、分かってるけどさ！　……」
ダメだ、一歩一歩が小さくて足が竦んで少しずつしか動けない。馬鹿だろ……僕は一度言ったことも守れない臆病者になってしまったのか……。目の前に何かが動く音……床との擦り音……剣道経験者！
「？！」
すかさず空気を切るような音。身体が反射的にギリギリと左へ避けるも肩には竹刀が掠り学ランが傷む。経験者なのは分かったが暗くて影が見えない。何を言おうとも僕は視力〇、三なのだから……。音で反応するも次次へと足さばきの音に翻弄されて竹刀の振りかざす音が聞こえない。
「お、お前誰なん……っだ！」
ブンブン、そんな音が耳元で響き竹刀へと目線を向けると足が払

われて僕は態勢を崩して床へと尻持ちを付く。次の瞬間だった——
竹刀が僕へと振りかざされた時、「蒼君を苛めるな！　苛めていいのは私だけなんだからっ！」そう叫んだミユは僕には見えない影へと体当たりをする。影が床へと衝突した音。安心をする余裕はまだない……。ミユの元へと駆けつけて手を伸ばして立ちあがらせてその場を離れる。
「イタタ、私頑張ったよ！」
「良くやったと思う」
表情は見えないが彼女の声は弾んでいてテンションが高くて……自分と比べると……。
「……橘蒼汰（たちばなそうた）」
影が僕のフルネームを呼ぶ……。どこかで聞いたことのある声の主。どこで聞いたんだろうか——

「上級生殴るなんて変わってる」
「……誕生日プレゼントくれる蒼汰の方が変わってる」
「付け加えて去年、僕が苛められてた時にいじめっ子四人衆を一蹴するアリスの方が変わってる」
「琴音さんが大好きな蒼汰……シスコンで変わってる」
「なっ？！」
少しの間が開いてお互いに笑いをこらえて、横尾道場のすぐ脇の公園のブランコに座り思いっきり爽快に笑う。笑うとはこんなにも爽快に感じたことは……無かった僕。いままで苛められてた過去。全てアリスが水に流すように助けてくれた。剣道でもアリスが輝いて見える。全てにおいて今の僕にはアリスが必要になっていた。
「蒼汰のお嫁さんになりたい」
「僕もアリスのお嫁さんになりたい！」
「お婿さんの……間違え」

「そうだね」
小学三年の夏。僕とアリスはお互いにそうやって意識をしていたんだ。この関係がいつまでもいつまでも続きますようにと天の川にいる織姫と彦星に向かって……。

だが現実はそう簡単に上手くはいかなかった。
「その手紙、早く捨てろよ。どうせ秋山からだから捨てられないとか？」
「違う！」
小学四年生。ラブレターを異性へと渡すのが流行っている中、僕はアリスからラブレターを貰った。去年確かにお婿になりたいと言った……だけどこんな形でとは予想もしてなかった。
「だったら捨てろよ。『僕は秋山ノビルは嫌いです』って言いながらよ」
放課後の教室にはアリスはいない。今いるのは僕とアリスに一蹴されたメンツと女子のアリスを嫌うグループ。アリスはいない……だから大丈夫。そう思った。
「ぼ、僕は秋山ノビルが嫌いです！」
思いっきり手に力を込めて手紙を引きちぎりゴミ箱へと投了する……。アレ、おかしいな……目からしょっぱい水がたくさん流れて……心がとても傷む。なんだよ、僕は悪くないのに……。

「秋山さん、見てよアレ」
気付くと教室の入り口でそのアリスを嫌うグループの数人の女子がアリスを呼んでいたらしく、アリスはただ無表情で教室を立ち去ったのだ。やり過ごせない思い……。怒りと何かが入りまじって……理性が狂った。
「ふざけんな！　よくも騙したな！　このゴミ人間ども！」
中心核の男子を飛び蹴りで押し倒してひたすら殴り続ける僕。それを呆然と見過ごす周りの連中。そこからの僕の記憶は一生捨てが

たい記憶となったのだ。

そしてその日から道場であってもアリスと話す機会が無くて一年が過ぎた。

「えっと、残念ながら橘君は父親の転勤で引っ越すことになりました」

担任の言葉が耳に入らないぐらいに心が荒んで何もかもやる気が出なかった。絶望的だった……。まわりのクラスメイト達はコソコソと話してどうせ嬉しがっているんだ……そう思った。

その日の夜、一本の電話が家にかかってきた。非通知で「……ごめん」

それはきっと僕の推測ではアリスであって、涙がまた出てきて泣き崩れたんだ僕は。

あの頃から勇者になりたくて通った横尾道場。何も進展してなんかしてなかったんだ。他人にいつまでも支えられて僕は『勇者』の言葉の意味も全部理解はしていなかったんだ――

三話　アリス

「平民から勇者へとって話か。山で見つけた剣が民達が困っていた悪魔を倒せる剣ってだけで正直、どこが勇者伝説なのか俺には分からんがな」
　場所は学園本館の食堂。一緒に朝ご飯食べたいとのミユのご要望で腕をふるっているのはまさかの葉也だ。以外に料理上手かったんだな。そして腹を減らし過ぎて勇者伝説の説明が適当になっている深月先輩。僕の隣にはメイド三人を並べて雇っているミユ本人はメイド服とは行かず制服でいる。ちなみに今日は月曜日で昨日、僕はあの知り合いのようだった影を逃してミユの執事は継続中。正直誰にも執事をやれとは言われてない気がするが燕尾服を来ている僕。本当にミユは何が目的なのだか……。
「あとそこの執事」
「はい？」
　いきなりなんだろうか。人を名前を燕尾服来ただけで執事に変える淀姫は。
「誰が川の神様だ。アレだよ……昨日自室だからってミユに変なことしてないよな？」
「べ、別にベットの中に二人一緒に居ませんでしたよ」
　あれ、何故だろう。深月先輩は能面のような表情で上体を起こして僕の脇に来て完全に上から物を見てる視線を送っていらっしゃる。あとやたらと心を見通す能力が……超能力者か、深月先輩は。
「要するにベットの中に居たんだな、殺す」
「違うよナッチー！」
　イヤイヤイヤ、と反論しかけた間にミユが珍しく言葉を挟んでくる。笑顔が似合いすぎて可愛いのは内心に閉まっておく。ミユはその笑顔のまま右人差指を立てて、「本当は抱き合いました！」とのこと。あぁ～、僕の走馬灯が深月先輩の手でみることに。

「変態はほっておいて朝食頂くとするか」
だんだん僕の扱いが適当になってるのは気のせいか、ビービー弾を当てただけで心配もなくなってきたぞ？　目の前は葉也が作ってくれた野菜炒めにトースト二枚ずつが各テーブルに置いてあり、バターを塗って野菜炒めを挟んで食べるとか。僕がその朝食へと手を伸ばした途端に深月先輩が不機嫌そうな顔で強盗をしてくる。すいませ～ん、ここに朝食強盗が居ます！
「ちょ、朝の源なんですけど深月先輩！」
「罰だ、罰。生徒指導の先生の代わりに俺がお前に罰を下す」
理不尽極まりない目の前の朝食泥棒はズカズカとがっついて口へと僕の朝食は姿を消した。その脇から僕の「深月～先輩～！」という情けない声にミユは同情してくれたのか野菜炒めを挟んだトーストを差し出してくれた。貴方は女神ですか！？　恩恵を頂こうと手を伸ばした途端に手がミユによって阻まれる。
「はい、あ、あ～ん」
「え？」
手先がお綺麗ですね、と言う感想しか今の僕の思考回路には無い。上目遣いでこちらへとそのトーストが口元へと迫ってくるではないか。困った僕は助け舟を出してもらおうと深月先輩へと視線を移すが睨んでいるだけで何の解決策もなかった……舟、沈んだよ。
「あ～んしてっ！」
「いや……でもそういうのは」
「あ～んしてっ！」
「本当のカップルがやるものじゃ……」
「あ～んしてっ！」
「やっぱできませんっ！」
「出来ないなら……坂田、祠堂（しどう）、涼乃（すずの）、蒼君の口あけて」

「「「はい、お嬢様」」」

「ちょっと待て！」

どんなだよ。どんだけ僕はメイドに囲まれるのさ。メイド服が一角の恐怖症になるって。慌てて席から離れて逃げようとしたところで真っ正面の深月先輩のロンファへと足が引っ掛かり顔面から床へこんにちわ。

鼻を擦る暇もなくうつ伏せの僕の両腕を可愛らしいメイドの坂田さんが優しく持ち上げて……両腕を一気に四五度へと持ち上げられてそのまま坂田さんの両足が僕の背中へと入りＫＯ。

「あぅ……あぅ」

言葉にならないのを哀れむように他のメイドが「さすがレーデルさんが言うドＭ変態様ですわね」や「レーデル姉が言うんだから問題ないよ」とのこと。前者がサイドポニテで止めてる祠堂さんで姉御肌の雰囲気を臭わす口調が涼乃さんが後者。なんとも個性派メイ……ド。

「蒼君の……馬鹿」

小さくつぶやき声が聞こえたが応答する力が僕には無かったようで混迷状態へ……。

「昼休みって言うのに元気ありませんね橘君」

教室の自分の机で突っ伏している僕へと話しかけるのは他でもない相部屋の葉也だ。

「メイドが恐怖症になりそうなんだが」

「それは大変でしたね」

顔を上げると笑顔が輝く葉也の両手には焼きそばパンが二つ。丁

度腹が空いた時間だし気がきく奴だな。という淡い幻想の中、手を焼きそばパンへと伸ばすと「ダメですよ」とのこと。
「なんでだ？　そんなに食べたら腹壊すぞ」
「どこの乳酸菌ですか。私は生活委員ですから学園郊外の猫ちゃんへとご飯を上げに行くんですよ。付いてきます？」
「暇だし、行くよ」

「確かこの辺りなんですよね」
学園にこんな場所があったのか？　という疑問さえ抱く場所だな……。辺りは小さい農家のような田畑と池がある。こんな辺りに猫って言うよりは野良犬っぽいイメージがあるな。
「名前とか決まってるの？」
「黒髪の容姿端麗の女の子が居たんですよ」
なんでいきなりそんな典型的な物例えなのだろうか。黒髪で容姿端麗なんてまんま大和撫子かそこらの一〇代、二〇代女子でもいるだろうに。首を傾げる僕に苦笑いして「恥ずかしながら一目惚れしちゃいまして」とのこと。そういう意味か。猫ちゃんっていうのは照れ隠しから来たジョークってことか。だから今さっきの焼きそばパンもその彼女が好きだからって理由なのかはさて置き、
「どういう容姿なんだ？」
容姿端麗じゃ可愛いか美しいでとどまってしまうから細かく詳細を詳しく聞こうではないか。
「可愛いって言うより美しいですかね。私、橘君と違ってロリな趣味ないんで」
輝いて言うな、輝いて。ロリってなんだよ全く。そもそも年上好きって言うのは妹が強烈なキャラすぎるとかで年上に逃げる現実逃避をして年下好きって言うのは姉が強烈なキャラすぎるとかで年下に逃げる現実逃避の一つなんだって話だ。いや、別にミユとか深月先輩は年上な訳なんだが。無論、その年上好きでも恋愛対象の好き

じゃなくて友達って言う意味で好きだ。
「あっそ」
適当にあしらう僕の言葉に葉也は苦笑い。
「しょげないでください。携帯のバイブ音が聞こえてますけど良いんですか？」
言われてみれば胸ポケットで鳴っていて多少くすぐったい感じはあったが僕のだったか。
「しょげてねぇよ。別に深月先輩の使いパシリになるよりこっちで葉也の恋の行方が見たいから」
「恋の行方って言われると恥ずかしいですね。鈍感って良い響きですね」
「嫌味のように聞こえたんだが？」
「気のせいですよ。含みなんてありませんから」
いつも以上の葉也の笑顔はいつも以上に僕を苛々させるのであった。

「あ、ちょっと隠れてください」
顔が衝撃で縮んで伸びたような感覚を味わいそこらの隠れきれなさそうな茂みへと葉也の鍛えた腕に拉致をされる。必死なのかは分からんが僕の口を封じる意味なんだが。もがもがとしかならない僕の声は届くはずもなく、少し興奮気味の葉也はその一目惚れのような人物を覗いている。初々しすぎるぞ。ここで気になるのは当然な訳で隙間からちらりと覗くと……腰上まで伸びている綺麗な黒髪、そしてどの角度から見てもスカートからは綺麗なくびれのようなラインが……確かに美しくて一目惚れする葉也の気持ちが分かるが、誰かに似ていた。
「美しいって思いませんか、ロリ教授？」
「もふもふ、もふふんがっ（誰が、ロリ教授だ）！」
やはり誰かに似ている……僕は塞さいでいる手を強引に引きはがし、隠れていた茂みから出て行きその彼女の元まで早歩きで向かう。

背中を思いっきり引っ張り引きとめてくる葉也だがしっかりとこの目で確認したいんだ。
「ダメですって橘君！」
「良いじゃん。僕の自由だ。権利侵害するなら僕の姉呼んで告訴するぞ」
諦めが付いたのか「仕方ないですね」と付いてくる葉也。諦めも肝心って言うからな。顔を下げてテンションも下がり切った葉也を横に僕は彼女へと「すいません……あの」と話しかける。すると耳に髪を掛けて振り向く黒髪の彼女。

「……アリスって呼んで、蒼汰」
第一声と発言で彼女は……僕の良く知る知人であったのが分かった。慌てて取り乱す僕よりか取り乱す葉也。葉也は予想外の展開に校舎側へと全力で走って行ってしまい一対一の対話状態になってしまった。そして僕の過去でアリスって呼んでというのはあの子以外あり得ないのだ。

秋山（あきやま）ノビル、そう……僕の過去に一番影響を与えた彼女だった――

四話　ストーカー犯捜索

『……アリスって呼んで蒼汰』
　三年ぶりに再会した幼馴染の彼女はそう言った。何もかもが嫌な思い出で思い出したくない思い出に変換されてしまったのに、今さらなんと言おうとも彼女は”あのこと”を許してはくれないだろう……。珍しく僕は男子寮の自室のベランダで頬杖をついて溜息何かを漏らしている。辺りは春ならばの涼しさでホクロウが鳴いている。

「考えても何もないから……寝るか」
　消灯時間一一時から四時間を超して三時。寝付けなかった結果、ベランダで時間を潰していたが結局のところ悩んだって今は何も変わらないという結論に至った訳だ。僕は部屋の中へ戻り天井にある楕円（だえん）の光に目が行った。恐らく葉也だ。いや葉也確定だ。
「寝れないのか」
「私（わたくし）は寝てます」
「嘘付け。携帯電話弄ってるだろ」
　突然とその天井の楕円（だえん）の光が消えたわけでもなく返事が返ってくるわけでもなかった。だが「独り言だけど」と前置きをして話を続ける。
「ミユの護衛任務、僕だけじゃ守れないって思うんだが」
「……」
　相変わらずのNO返答。まるで屍のようだ。
「ストーカー犯が実は秋山ノビルだったらどうしますか、橘君」
　ボソボソと聞こえた声は音が無いせいなのか分からないが透き通って耳へと届く。僕もミユをストーキングしているのはノビル、もといアリスだと思った。どうしても『……アリスって呼んで蒼汰』が耳から離れずにいるのもまた事実。アリスは確かに小さい頃同じ横尾道場で剣道を習っていて僕より遥かに上手いが……こう、物体

に表せない凄さがあって昨日の夜の夜襲の際の擦り足は何か物足りていなかったのだ。
「そんなことをする奴じゃないって僕は思ってるんだ」
「信用、してますね」
信用、僕はアリスを信用して裏切りなどをしないと心では誓っていた。だが彼女は僕の事を信用するわけでもなんでもない。今となってはただの古い友達。進行形での友達なんかでは無い。高校が同じになったただの同級生、それだけのことだ。
「一方的な信用って奴だよ」
ベットへと身体を預けて寝転がり携帯電話を開けて時刻を無意味に確認をしてその言葉を吐く。動揺しているのか両手が震える。彼女がこの高校へと居るのがそんなに嫌なのかも分からない。ストーカー犯とか厄介事になっていて何がどうなのか頭の整理が付かないだけなんだ……きっと。
寝がえりを打ち、丁度良い抱き枕のような状態の布団に抱き着き深い眠りへと就く前に「きゃぁ！」という悲鳴が布団の中から……。急いで危険回避のためにベットと距離を取ろうと強制脱出を試みるも足をその悲鳴を上げた人物に掴まれて顔面は勢いよくカーペット上の床へと激突。ちなみに今日二度目な。腕立てのように両腕の筋肉で上体を起こしてゆっくりした動作でベットの中へ戻ると巻き布団の中から「大胆、だね……蒼君」とのこと。

「きゃああああああ！！」

——僕の眠れない夜は担任からの反省文で過ごしきったのであった。

「不幸中の幸いでしたね」

「どこがだよ葉也」
今日は珍しく苛々した朝だ。昨日というか日にち的に今日なんだが反省文を二五ページをひたすら書きつづった僕は精神的に疲れて今日分の気力は無い、と自分で痛感をする。その気力が無いせいなのか朝食は部屋の冷蔵庫に一週間放置してあったヨーグルトを葉也と二人で分けて朝食を取っている。そんな中、部屋のドアへとノックがされて葉也が「はいはい」と呟き応答をしてドアのカギを開けて大きな荷物を受け取っている光景が見える。一つの大きな段ボール箱は部屋のドア擦れ擦れで入ると次から次へと荷物が運ばれていく。

「浦島太郎な気持ちですよ」
どんな感じなのかは分からないがどうやらこんなに荷物を頂くとそうらしい。基本葉也の荷物で僕のは学園の入学式にいろいろ持ってきたからその大きな段ボール箱一つだけが僕の荷物らしい。僕の父や琴音姉は基本的に心配性だからなのかもしれないな。
「知らん。取り敢えず朝食食べたら今日は学年集会朝からあるから片づけられる荷物から片付けるか」
「そうしますか」

「……（ごくり）」
喉をゆっくりと生唾が通り緊張しているのか両手が震えている……何がこの大きな段ボールの中にあるのか気になるが浦島太郎を耳にしたせいで躊躇う僕。お爺ちゃんになったり性転換してお婆ちゃんになったりしないよな、きっと。段ボール箱の開け口のガムテープをハサミで開けて行きガムテープがはがれた工程まで行った。葉也は相変わらずの笑顔でこちらを凝視……送り主は琴音姉であるからして……エロ本は無しで、エロ本は無しで、エロ本は無しで……と念を込めてゆっくりと開封。

「……ってぇぇぇ！？」
「来ちゃった、エヘッ」
来ちゃったエヘッで許されることではない……とその前にエロ本では無かったものの中身は僕の姉の琴音姉で歩くエロ本のような感覚の人。

「なんで来たんだよ琴音姉……」
「え、橘君のお姉さんですか！？」
「……いや魚類に転職した姉を持った覚えは無い」
「？」
ふつくしいを連呼する葉也。お前って一途キャラに思えたんだけどな……まぁ良いか。問題はこの歩くエロ本感覚の実姉の琴音姉だ。服装は家で居るような格好で上ジャージ、下ジャージのジャージ姿で居る。どうやって勇者伝説探求部の女子陣へと説明しようか……。そんなことで先が思いやられる僕は琴音姉に引きつった笑顔で右人差指を突き立てて「帰れ」と御指令。

「蒼ちゃんのいけず～」
頬をやたらとグーで擦り付ける琴音姉はどうやら機嫌が悪いのか耳元で「蒼ちゃん、言葉づかい悪いと……襲うゾ」とのこと。身の毛も弥立つ心霊スポットに居るのか僕は背筋に悪寒が走ったのであった。

「邪魔するぜって琴音先輩！」
「あら、あからさまに表情を作るのが上手いと定評の深月ちゃんじゃない」
唐突にベランダから侵入してきたのはこの会話で分かるように銀髪ポニテの深月先輩である。琴音姉とは対照的な性格、いや同類並

みな騒がしさ。中学時代もこんな風に僕の部屋を琴音姉と深月先輩が荒らしに来たのは記憶に新しい出来事で今日は男子寮の自室までも荒らしに来たって奴か。騒がしいにもほどがあるって話だ。

「蒼ちゃんに手、出したら……分かるわよね深月ちゃん」

琴音姉の笑顔がキラキラ輝くが僕にはダークサイドにしか見えないのは秘密裏に心の奥へと閉まっときます。そんな腹黒い笑みに威圧感を感じた深月先輩はまさかの怯え顔。この人たちの過去に何があったのだろうか。

「りょ、了解です……琴音先輩」

珍しいにも程があるって話なんだがシュンと縮むしおらしい深月先輩も面白、痛っ！

「ちょ、なんで僕の背中蹴るんですか深月先輩！」

気付くといつの間にか僕の背後に周り背中を蹴っていたという新感覚のアトラクションゲーム……というのはポジティブ思考すぎたか。

「なんか顔に『シュンと縮むしおらしい深月先輩も面白い』って出てたからムカついたからだ」

凄いな、僕の顔。早く四次元ポケットみたいにならないかな……顔。

「あらあら、暴力、反対よ？　性的なら、別だけど」

なんか危険な人が学園に紛れ込んでいるのは気のせいだろうか……。というより不審者。

「せ、性的？！」

「少々落ち着いて下さい成瀬先ぱ——」

ふつくしい連呼をしていた葉也はどうやら状況判断が出来たのか『性的』という言葉に過剰反応を見せて頬を赤く林檎のように染めた深月先輩の暴走を止めようと誰よりも先に動くが誰よりも先に先制パンチを貰いＫＯ。無事に来世で会おう、相室の住人。

「性的って……な、何なんですかー！」

暴走の矛先は無論、僕宛でした、畜生。

――「ストーカー犯？　だ、誰の？！　誰のストーカー？　蒼ちゃんがストーカー被害受けてるの！？」

　突然現れた琴音姉に手伝ってもらおうとストーカー被害の事を教えた僕。荒れ狂う琴音姉は連鎖妄想を繰り返してどうやら僕がストーカー被害を受けてるような話になっているが説明がしにくいんだよな……この人には。例えば男の話であるならスルーをしてニコニコしているが女の話になると一々突っかかって面倒臭いところまで持って行く。ミユの名前、ましてや下の名前でお互い呼び合っているのは何かとまずい気がしてならない。ストーカー被害の話は夜襲までは話したがあとは略。それと話の辻褄が曖昧だったが女の名前は一応伏せといて正解だったようだな。

「あぁ、俺その被害受けてる子知ってますよ」

「ほ、本当なの！？　教えて、教えろ！」

「お、おお落ち着いて下さい琴音先輩！」

「了解承知の助！」

　どこの時代の御方だよ。というツッコミは心の中で出来る状況というのを把握しといて頂きたい。

「ミユですよ、ミユ」

「……あのヒンヌー娘か？」

　どこの宗教の娘だよ。というツッコミ（以下省略）。落ち着きを急に取り戻した琴音姉は目が点でまるで脳内が真っ白のような感じなのか凄く間抜けな表情で正座をして「あの娘なら大丈夫よ」とのこと。投げ槍だな、おい。

「それで今、蒼汰が護衛としてミユの執事になってるんです」

「おし、ストーカー犯を今日中に捕まえてみせる。琴音、我が命の炎の灯火が消えるまで！」

　何故か琴音姉は深月先輩の発言で闘魂を取り戻してやる気を漲らせている……灯火って一体どこの時代の（以下省略）。

五話　臆病者

「蒼君！　私の下着がってコト先輩！」
誰もが同じ反応を取るのはどういうことなのか。ミユは慌てて荷物整理をしている僕と葉也の部屋のドアを勢いよく開けて僕の胸へと飛び込んできての一言。若干おでことおでこが当たり「痛っ！」とのこと、貴女が悪い。そして一方、能面のような表情で琴音姉は手首を柔軟させて骨の音がポキポキと。そもそもミユって琴音姉の存在をなんで知っているのかが不思議に思えたんだが、今は良いか。
「良い度胸ね……この琴音様の弟の蒼ちゃんへと手を出すとは」
僕は首にミユの手が回っている状態でミユと琴音姉のなんか訳のわからない睨み合いに巻き込まれているんだが。そもそもいきなり抱き着かれて心拍数上昇でプラス良い匂い（女子高校生以上の年齢の特権な匂い）は悩殺すぎる。
「あらあら、コト先輩。久しゅうございますね」
どこの王奥なんだよって言うミユの発言。そして懐かしき敬語。
誘拐された以来聞いてなかったがこういう状況で自然と出るんだな……なるほど、理解した。
「ミユさん……突然だけど貴方、もしかして蒼ちゃんの事が好きなの？」
それは愚問だろうとか思ったが……愚問でどうやら正解だ。挙動不審になったミユ先輩は僕と目が合うなり「す、好きとかじゃ、無いよ！」と言って慌てて首に回した手を引く。僕の真っ正面へと正座してパニック状態に陥っているらしい。
「分かってるから大丈夫だよミユ」
優しくフォローをかけるつもりで微笑んだつもりだったが歩くアトラクションゲームが始動した。
「死ね変態！」
背中を勢いよく蹴られて悲鳴が出る前に蹴りを浴び続けて死ねを

連呼する深月先輩。
「もう！」
と、なんとなく叫んでみて深月先輩を退けて「静粛に」という慣れない言葉を前置きにして場が静まる。たまには怒らないと女子陣は暴走が止まらないからな。
「久しぶりに再会するのは良いと思うけど時と場合を考えて！」
反省したのか、「は～い」という空返事が女子陣三名から聞こえた。咳払いをして改めて、
「で、ミユはどうしたの？」
と、先ほどの言いかけの下着がという言葉に戻る。別に下心とかじゃないからな。ミユは苦笑いをして頬を掻きながらこちらを見て口にした。
「盗まれちゃったんだ……」
「……」
部屋には何か重たい空気が流れているがみんなきっと
『リアルな事件来た！』
と驚いているはずだ……ストーカーがいるんだでの顔面硬直より遥かに顔面硬直……日本語らしくないけど実際そんな顔して驚いている。

「とりあえず、冷静に考えると『ミユさんのストーカー犯＝ミユさんの下着を盗んだ犯人』で成立って考えるわ」
琴音姉の久しぶりの姉らしい言葉。軽く尊敬したぞ。いつも……ってなんか頬が痛い！
「なんで琴音姉、僕の頬をがっしりと両手で掴むのさ！」
「なんか恥ずかしかった、そしてムカついた」
どうやら僕の顔は四次元ポケットのような性能にはなれないと思った。意味分からんが。
「本当にお前良く顔に出るな」
横へと座り、座高の関係で深月先輩が僕を見上げる形で右人指し

指を突き立ててその死んだ魚のような目で見てくるではないか。知らんよ。そもそも顔に表情が出るのは橘家独特の能力って奴だろ。生まれつきだ生まれつき。
「それはどうも」
「今、お前……『生まれつき』とか思ったよな？」
「……」
「何か言えよ！」
痛っ！　耳引っ張るとか暴力反対だろ。そもそも何もしゃべらないと顔に出ないってどんなキャラだよ。顔にでも喋る言葉とか書いてあったりな。
「とりあえず、聞きましょう、ね！」
「分かったから顔近い！」
僕の右頬を両手を添えて思いっきり押し飛ばしてくるのはかなり首に負担が掛るんだぞ、という心の中の抵抗。
「とりあえず犯人捜索を今日の放課後したいと思うから図書館集合で、解散で」
場を仕切り今日の放課後に犯人捜索をすることに満場一致で終わり、深月先輩はつまらなそうに口を尖がらせて僕の腕を引っ張りと他の周りより先に廊下へと出る。

「なぁ、蒼汰」
「どうしました深月先輩？」
いつになく挙動不審な先輩なのだが、どうやら真剣な話らしい。まぁ、長年一緒に居る勘なんだけどね。廊下にただ突っ立っているだけで会話は進んでいく。
「ここだけの秘密なんだがＫＦＫ(ケーエフケー)って知ってるか」
「消しゴムがファイティングポーズするキッチンですか」
「どこのキッチンだよ。全く違う。勝手に大喜利(おうぎり)始めんな」
「は～い」

「ＫＦＫとは≪琴音様ファンクラブ会≫の略なんだ。そんでいきなりだが俺の過去を話すつもりはないけどお前なら話せる気がするから言うよ」
「琴音姉のファンクラブ会か……（別に近所の商店街にもあるから不思議ではないんだよな、一応可愛いって言うのは弟でも分かってるし）。別に聞く気ないんで無理してまでも言わないで良いですよ」
「お前の過去だって俺は……琴音先輩に聞いたんだ。だからついでだ。……勇者、なりたかったんだろ？」
「少し違いますよ」
苦笑いでその話題を振りきろうとする僕に深月先輩は小声でこう呟いた。
「勇者になりたかった訳じゃなくて、呼んでほしかったんだろ。自分は小物って決めつけて自分で勇者にはなれないって思ってたからこそ呼んでほしかったんだろ」
「半分当たりで半分はずれです、深月先輩。確かに僕は自分で自分の価値を決めつけてました。でもその時はすんなり”ケジメ”がつけられなかったんです。今と違って」
「ケジメか。そうだな……心が子供だと諦めきれないよな。俺の場合もその”ケジメ”が付かなかったんだ――」
両親を失い呪われた娘と謳われて親戚中をグルグルグルグルと回されていって最終的に両親の父方の祖父母に引き取ってもらうことになった俺は正直、嬉しいようで悲しかった。当時四歳の俺には理解は出来ないが厄介扱いだったのは小さい俺でも分かっていた。だから分かっている分、悔しくて悲しくて涙が夜中に流れて行く。別に両親が居なくて寂しい訳じゃない。もともと両親は俺の世話なんかしてくれなかった。全部今の祖父母に面倒をみてもらっていたんだ。だからあの涙は亡くなった両親なんかに向けたわけじゃないの

だ。全部、『不幸で惨めな俺へと送った涙』なのだから……。
五歳になると祖父母が習字教室のチラシを観て、「懐かしいわね」と微笑んでいたのがきっかけでその習字教室へと行くことを決めて祖父母へと言い、通い始めた。通い出して二年の月日が経ち小学生以下の習字展覧会コンテストで同じ学年の越谷優子（こしたにゆうこ）が金賞で俺が銀賞のワンツーフィニッシュで琴の死は七歳という最年少で世間から注目を浴びるようになったのだ。
勿論、習字教室で友達が居なかったのでその金銀をきっかけに越谷優子が人生初めての友達になった。だが一年が経ち越谷優子は俺を毛嫌い話さなくなった。講師方が言うにはライバル視をされたと俺に説得をして習字へ専念させようとした……。
九歳になり、ある一つの事件が起きた。俺の作品と墨が突如消えたのだ。家を探してもどこにない。焦る俺は毛嫌いをしていた越谷優子を犯人と決めつけて本人に話すも泣き始めて結局は俺が悪者になったのだ。理不尽すぎる怒りは誰に当てることもなく小心者の自分が許せなかった。そしてなによりも『これから習字が出来なくなる』という恐怖心に煽られて、祖父母をがっかりさせてしまうと考えて胃がねじれるように気分が悪くなる。その年の習字展覧会コンテストには作品は間にあったものの作品には越谷優子がこけたと言い訳をして墨で台無しになり……絶望をして引き籠るようになったんだ――
「深月先輩はそれでも、引き籠っても諦めて無かったんですよね？」
「当時の俺にその質問をされたら確実に”諦めてない”って答えてたけど今の俺には分からない。結局のところ、子供の時って何しても罪悪感がなかったし、なんでもできたから、そう答えてたと思う。

子供の事に平気で罪を犯す者には罪悪感って言う言葉は存在してないんだろうけどね」
「何でも出来るか……僕もきっとアリスのために勇者になりたかった、ただそれだけで満足を得ることができたから」
「俺にはそうは思えない。勇者になりたかったのは”誰かのため”じゃなくて臆病な自分と”ケジメ”を付けたかっただけだと思うぞ」

「自分の……ために……」

結局のところ、僕は、勇者は誰のためでは無くて自分のためになりたかった……勇者の定義なんて無くて誰かのためにと言うのはきっと良いわけであったってことだ。そしてあのときもアリスの気持ちを考えずアリスを守った気でいる僕は、ただの『臆病者』だったってことだ。

「だけど俺はお前の姉、琴音先輩に中学の時に出会って、お前とも出会って自分が変わったって思ってるからよ……その、ありがとな」
背中を向けて、深月先輩はツインテールの両サイドの結び目の赤いリボンを取り、「感謝、してるからな……お前にも」と捨て台詞を吐いて廊下をまっすぐ走って行ったのであった。

全てが全て自分の思い通りに動くと信じるのではなくて、動けば『勇者』。動かなければそれはきっと助けた気でいる気弱な『臆病者』ってことだ——

六話　企み

今日の朝、宅配便で届けられた大きな僕宛の段ボール箱の中身は琴音姉であった。そして何故か琴音姉は葉也以外の人物は知っていた。だがそれは結局のところ琴音姉が条咲学園を退学する前の友達と言えば納得が出来るわけだ。二歳年上で勝手に退学をして勝手にこの高校を進めてきた琴音姉……何もかもが琴音姉に仕組まれてきたように生きてきた僕は少し首を傾げるのである。何が起きてここに居るのかも、自分で分からなくなるぐらいだ。

「二番目到着か〜、残念」

放課後に集合場所と指定された図書館の奥の机で突っ伏していた僕。横から囁くように聞こえたその声に顔を勢い良く上げる。勿論声音で分かるんだが、「ミユか……」と口にする。何か気に入らなかったのかミユは死んだ魚のような目でこちらを凝視してくる。僕は無罪を主張する。

「深月先輩はどうしたの？　一緒のクラスだよね？」

「一緒のクラスよ。ナッチーは清掃しに行ったの。執事って自己主張する割には仕事をしない執事を持って、ちょっとネガティブなの私」

心にビービー弾でも入ったのかとても突き刺さるお言葉だ。なるべく目を合わせないように顔を机に突っ伏した状態へ戻るも背中に抱き着いてくるミユ。

「ちょ、ちょっと！」

「……図書館では静かに、だよ」

ミユが自称天然とは深月先輩に聞いたが天然はこんな性質なのか……いや、元から素の自分で居る＝天然だったのか……畜生、自分の脳内変換機能が狂ってやがった！　後ろから抱きついてくるミユは勿論制服姿。メイド服だったら、多分トイレへ急行していた……確実に。だが脚は白い肌が僅かに露出させるニーハイソックスとい

う武器があって……トイレへ急行物だ。
「分かった。分かったからどいて。話すなら席に座って、お願い」
青少年の性的衝動というのか、すかさず邪な考えが思い浮かんでしまうのはそれのせいだ。身体の密着を避けてミユを一応安全地帯の席へと座らせてこれなら余計な邪な思いは消えるはず。ミユは困った表情を顔を傍で見せてから渋々とお菓子を買ってくれないお母さんに腹を立てた男子小学生のような表情で座る。アナタハナニガホシインダ、イッタイ。

「で、なんか用があるから僕の横へと座ったんだよね？　ね？」
そっぽを向いてプクゥ～っと膨らむほっぺなんだがマシュマロのようだ。何故だよ。触りたい衝動を我慢して話を掛けるがどうやら無視の方向だ。
「いや部活だけど……別に蒼君のためにわざわざ会いに来ると思う？」
「思わないな。そっか、ミユも同じ部活だったよな」
「うん。ところで……なんかえっちな考えでもしたのかな？」
相変わらずな胸とかは思ってないんだが、そう言われると制服の上からの思春期的衝動で判断してしまう癖が……どっか行け邪な僕！
「とんでもないよ。別に胸が小さいとか思ってないからって、すいませんでした！」
思わず口に出してしまった僕に制裁を下すかのように背負っているスクールバックを降ろすなり、勢いを付けてその軽そうで重かったスクールバックは僕の顔へとヒットをしたのだった――

「――早いなお前らって蒼汰、どうしたその鼻血？」
深月先輩が来た頃には僕は鼻にティッシュを丸め込めて情けない表情で機嫌が悪いミユの隣へと大人しく座っていた。何も言わず僕はただ深月先輩に手を振るのであった。
「良く分からんが」

頬を掻きそんな前置きを置く深月先輩。確かに良く分からないと思うよ。
「えっちなことはやめとけよ……図書館だからって」
この人はどんな動画をみたのでしょうか？　どうでも良い疑問が脳内を徘徊するが顔を横へと振い「ないですから、そんなこと」と冷静な判断のつもりであった……がまたもスクールバックが床から僕の顔へとクリーンヒットをするのである。
「痛っ！」
「……馬鹿蒼君」
ミユは恥ずかしそうな表情でこちらを見つめてくるがスクールバックは痛いという事実には変わりないぞ。スクールバックをミユへと押しつけて目の前に座った深月先輩へと「あの深月先輩」と話しかける。予想外に「なんだ？」と罵声は飛んで来ないものの頬を抓られる始末。
「痛いです！」
「そりゃ、生きてるってことだ。感謝しろ、俺に」
「深月先輩にですか……いや、おかしいでしょ」
「あぁ？」
「いえ……なんでも」
鬼のような形相でこちらの首をいつ狩りに来るか分からない僕は首を学ランの襟内へと引っ込めて顔を横へと振る。暴力と言葉の暴力反対！
「そういえばなんだ？」
「えっとですね、琴音姉に関して——」
「シスコンきついよ蒼君！」
隣の席からさっきまで不貞腐れていた表情のミユが僕の言葉を遮って反論？　なのか分からんが口を挟む。そしてミユの表情はニヤニヤしているんだが、どういうことだ。
「やめろ、ミユ。こいつは真面目に相談しようとしてるんだ、琴音先輩について」

ミユがニヤニヤとした次は深月先輩の悪魔のような笑み。何を企んでいるのだろうか僕には予想がつきもしないぞ？

一話　……喧嘩売る。

――「第一回、ストーカーを誘き寄せる会ｉｎ遊園地！」

「ちょっと待て！」

どうしてなのか、という疑問が多々ある。僕と深月先輩とミユと葉也というういつもの勇者伝説研究部のメンツでどうして電車に乗り駅三つ超えた隣町の遊園地に居るのかが謎だ。謎だらけだ。深月先輩はノリノリであんなことを言うがただの遊びだ。それと学校サボってまでも行く意味なんだが。

「はい、副部長どうした？　ミユのメイド服でも期待したか？　甘い、甘いぞ青少年！　今日のミユは制服とニーハイソックスという誰でも考えそうな格好だ」

いや、あんた、サラリと酷い事言わなかったか？　それとミユはいつもどおりの格好と言う説明で良いかと。僕はまだ肌寒い春の季節なため、長袖の白と黒の薄着とジーパンにショルダーバックというごくごく平凡な格好。深月先輩も制服で葉也は何故か学ラン。どいつもこいつも適当だが僕の場合は琴音姉に決めてもらったので何とも言えないのがまた事実。

「ねぇ、蒼君……」

ボソボソと僕のすぐ後ろで薄着を引っ張り頬をいつも以上に染めてミユが何か言いたがっている。耳を傾けるように「ん？」と言葉を返すと、

「いつも期待を外さないね！」

とのこと。それは喧嘩を売っているのかと思う発言。

「何、いきなり」

そこは似合うね、とかカッコいいねとか他にフォローする言葉は無かったことかという話。いや、待てよ。琴音姉に謎に対抗心を燃やすミユのことだ。きっとこの服装は琴音姉が選んだと思ったってことか。片手にぶら下げているスクールバックを降ろしてゴソゴソ

と何かを捜索するミユ。何をするんだ一体？
「有った有った！」
その”ブツ”を手に取り天真爛漫の笑みで近づいてくるが故に断ることも出来ない僕の苦悩は一体。ちなみにその”ブツ”について情報確認のために訊いてみようではないか。
「ねぇ、ミユ。それって……」
「コト先輩が蒼君が好きな物だから渡してあげてって言ってたから、えへへ。スクール水着だよ？　嬉しくないの蒼君？」
ちなみにより深く説明するとここは遊園地の出入り口であって人通りが多い＝ここで女の子から『好きな物』という言葉＝僕は変態性癖な人間……。
「嬉しくない！」

——危ない危ない、一歩手前で危ない領域へと足を踏み入れるところだった。
「ちょっとトイレ行ってくるから先に回ってて。あとですぐ追いつく」
そんな捨て台詞を吐いた物の僕の後を追うように（実際は深月先輩が追っかけろ、との命令であるが）ミユが男子女子トイレの狭間で待っているわけだ。別にかくれんぼをしているわけではないんだが「も〜良いかい？」と何度もミユのか細い声が聞こえてくる。そして毎度毎度返答する僕の身を考えてくれ……みんな僕を注目をしていて恥ずかしいにもほどがあった。今は洗面所で手を洗い終わったんだがな。

ハンカチを取りだして手を拭って男子女子トイレの狭間で待っているミユへと手を振り、
「お待たせ」
と、参上するものの……。

「……久しぶり、蒼汰（そうた）」

待っていたはずのミユはどこかへ姿を消して、その場所には、

「ア……ア、アリス」

秋山ノビル……アリスが制服姿でそこには待っていたのであった。

「……喧嘩売る」

彼女から発せられる言葉の数は混乱している僕に理解できるものではなかった――

二話　創設者

「ごめん、橘君！」
　今日はそういえばレーデルの赤髪ポニーテールの女性似非執事と愉快なメイドさんロードをミユは使わず電車で来たところに正直驚いたな、というどうでも良い事が頭を過っていた。
「本当は琴音さんをこの学園に誘き寄せるために橘君を闇討ちで殺そうとしただけなんだ」
　ちなみに僕の頭をどうでも良い事が過るのは目の前の男のせいである。昨日か一昨日かは忘れたんだが深月（みづき）先輩に言われたＫＦＫ（琴音様ファンクラブ会）のトップ、頭だそうだ。そんな男がどうしてお化け屋敷出入り口で僕に土の上に直に坐り、平伏して座礼をしている、もとい土下座をしているのかと言うと僕の隣にいる黒髪美人、秋山ノビルことアリスの活躍で犯人がこの人と特定されてという流れだからである。
「物騒な事を『今日の夕飯何？』みたいに話さないでくださいよ、怖いです」
「……蒼汰、例え下手だね。『わ、私の息子はどこへやったので——」
「重いよ！　アリスのほうがよっぽど……ってどうしたの？」
　彼女は僕の横で俯いている……どうしたのか心配になり肩へと手を置き、「どうしたの？」と僕はもう一度訊き返して、ゆっくりと顔を上げるアリス。ニヤニヤと笑みが止まらないのか笑顔でこちらを向き両手で顔を隠し再び俯く。何か良いことしたっけな？
「……何でもない、続けて」
　咳払いをしてまでも追求を拒否をするとは……。長い黒髪を片手で弄り「呼ばれた呼ばれた」を繰り返してガッツポーズをするアリスが居るのだが、本題へ入ることに決めた。

「で、えっと……名前は？」
「浦安重人だ……琴音さんの愛弟子の小神の下着は盗んでなんかいないぞ！」
　あぁー、この人犯人だ。それに愛弟子って。なるほど琴音姉の読みは当たっていた。
　携帯電話を取り出して番号のラストの九を押す直前に「「ダメ！」」とのこと。二人して言うことでは無かろうに。
「アリス、警察呼ぶまであるぞ？」
「なんですか、真ストーカー犯さん達」
「……アリス、ストーカー犯になった覚えは無いよ！」
「ボクも実質二回ストーカーしましたけど小神の方はまだバレてません！」
　ダメだ。後者は手に負えない程さっぱりした性格だ。そして阿呆。一応琴音姉と同年代であることは分かったが……ここまで来ると異人だ。
「ボクのこの情報が漏れないテクニック、ご伝授しましょうか？」
　口が物語ってるのによくそんな口から漏れないって思われるよな。
「遠慮しときます、あはは……はぁ」
　溜息以外の何物も出ないとはこのことだ。アリスはずっと僕の背中をポコポコという効果音を付けさせたくなるような叩き方をしているのだが、怒っていると言う意思表示ってことか。
「そうそう、橘君。良い情報有りますよ？」
「……あ、はい」
「信用してない目ですね。ボクの情報は本当なのですよ？」
　信用するしない以前に僕同様キャラが被ってると言うのは秘密だ。
「なんでも良いから教えてください」
「横暴ですけどさすが血縁族！　血を舐めさせてください！　いや、待てよ爪の垢でも間違いは無いような……」
　すでにその選択肢で間違いどころか人道外れてますよ～って言っ

たらこの人怒るだろうな。
「どうでも良いんで早くしてください」
「仕方ないですね……ここではＫＦＫとＪＢＫの第一次対戦が始まるんです。だから――」
「ＪＢＫってなんですか？」
「純粋にボーイズラブが好きな会です！」
　そんなに大声で言っていいことなのか……周りから悲観的な目で見つめられてるぞ？！
「わ、分かりましたからボリューム落として下さい」
「我儘な子ですねぇー。仕方ないですがここはボクの恩義を受けたこと忘れないでくださいよ？」
「あ、はい」
　このストーカー犯は何が言いたいのか良く分からんが変態ナルシストがあだ名で決定だ。
「それで第一次対戦の内容はですね……――」

――で、なんで僕とアリスが木の陰に隠れたベンチに座っているかは変態ナルシストの計画のようだ。ＪＢＫは何としても純粋に同性の愛を見たいが故にアリスがこの流れ上は敵。要するにアリスには囮になってもらう……そしてアリスが囮にすんなり受け入れてくれた条件は『橘君に守ってもらえる得トクサプライズ！』とのことだ。あの変態ナルシストの素性はアリスの口からは疑わしい言葉を聞いたのだ。
「……あの人は条咲（じょうがさき）学園生徒会第三八代会長なんだよ」
　とのこと。アレだ。世も末だ。ちなみに容姿は黒髪でＪＢＫのメンバー曰く『黒髪鬼畜眼鏡萌え属性』と言う肩書。普通に生きていれば変態ナルシストも少しは救いようがあったが……この先の条咲

学園の未来が心配なんだが。
「……蒼汰とこうするの久しぶり」
「だよね。えっとその……あはは」
無理に口角を上げて苦笑いをするもアリスはこちらを向いてしっかりと笑顔で接してくれている。僕はそのたびに思い出すのが例のラブレター事件だ……。幾度と月が経とうとも記憶からは消し去れない苦い過去。あの日は僕は一日中泣いて後悔ばかりをした。勝手に引っ越してをして、『ごめんね』というアリスの声を聞いて以来だ。
「アリスね……ソフトクリーム食べたいなぁ〜」
ニコニコと笑顔で居られるアリスが今でも羨ましい。小さい頃からの憧れも忘れてもいない。結局あの日から僕は何も変わっていないんだ。
「じゃあ、僕が買ってくるよ」
「アリスも一緒に行く。……蒼汰と一緒に歩きたいし」
「そ、そうか」
なんだか昔のアリスと違って明るくて可愛らしい仕草もするようになった……彼女は自分で変わって行った、自分が居なくても彼女は自分で変わって行けた。悔しいけど嬉しいような……そんな気持ちがざわめく。
売店へと着き、やや暖かい温度の中で売店でのソフトクリームの売り上げは好調でどうにか抹茶とバニラが残ってた。二つを買い求めて売店の中の空席へと腰を下ろすことにする僕達。
「……イチゴなかったけどなんかお互いに違う味って良いね」
唐突に僕の抹茶ソフトへと髪を耳に掛ける仕草をして一口、口にしたアリス。唇の温かさなのか抹茶ソフトに口付けた場所が妙に溶けている……その場所をみつめて思わず生唾を飲む僕。
「そ、そうだな」
「蒼汰も食べる？」

アリスが突きだすバニラソフトに何の抵抗も無しに一口、齧る。

中でふわ～っと風味が効いていておいしいけど途中から詰まる喉のつっかえ。口づけた抹茶ソフトの上からアリスが躊躇も無く舐めたりしている姿を見て再び同じ場所を見つめて……間接キス、などと言う小学生のような迷い……僕とアリスだけだから、問題ないよね……うん。という試行錯誤を繰り返す。恐る恐るとそこへ口を付けようとする僕は視線を感じて隣を見るとアリスがこっちを凝視している……食えば男、だよな。

「……間接キス、とか思った？」

「うぐっ……ま、まさか！」

心の読み、今回は当たって当然か。何を思ったのかアリスは抹茶ソフトを僕の手から奪い取り、コーン以外の全部を舐めまわして再び「どうぞ」と渡してきた……羞恥加減はＭａｘで売店の女性店員までもがお盆を両手で抱えてみつめている。アリスは気が動転したのかそわそわとし出して、自分がした羞恥を思い出したのか恥ずかしくなって両手で顔を覆う。僕の方が恥ずかしいって言うのに……。

「は、早く……食べて蒼汰」

「そう言われても……」

こういうときは話を反らせば……。

「あのさ、アリス」

「は、はい！」

顔を勢い良く上げて息が荒い彼女は何を思ったのか深呼吸をし出して、「……どうぞ」と目を瞑って顔を近づけてくるって意味が違う。けど……迫ってくる。どうする僕？！　アリスの手は僕の膝上に置かれてだんだんと迫ってくる……距離は僅か数？。避けたら失礼な気がする……。

「ラブレターのことなんだけど！」

大声で口にしていい事ではないと思うがこの雰囲気を流すために敢えて大声で言うとアリスは目を開いて見据えたような目でこちらを見つめてくる。地雷踏んだか……。

「……どうしたの？　頭逝った？」
「いや、だから……その、僕は……——」

「蒼汰！！」
抹茶ソフトは有り難ぃのか宙を舞い床へと着地。僕はそのまま前のめりになりアリスを押し倒すように勢いよく倒れて視界が真っ黒になる。冷静に考えてみれば背中が異常に痛い。そして何故か深月先輩の「は、破廉恥だ！」という怒号。僕は一体どういう状況なのか判断の材料が少なすぎるって押し倒したように倒したって大変だろ！　急いで起き上がった僕の下敷きになったアリスは、「いたた」と声を漏らして僕と目が合いそっぽを向いて頬を染めている……。
「俺を嫁にするって言ってその振る舞い、殺されたいか？　あぁ？」
振り向くとそこには手首の柔軟をして骨を鳴らしている深月先輩が仁王立ちしていた。後ろには葉也が居るが慌てて深月先輩の後ろへ隠れてしまった。待て自分。考えるんだ……って痛っ！
「その女とはどういう関係とかはあとでこってり聞いてやるが、状況が変わった。……本当は……と遊ぶために来たのに」
最後の呟きが聞こえなかったが僕は脳天にコブを見事に作られてその状況なら受け入れるしかなかった。

「えぇっと……ミユが誘拐された！？」
「お前声でかい」
ビシッと女性店員から借りたお盆で僕の頭を殴り、真顔で喋り出す。一々「お盆ありがとう」って言って女性店員に返さなくていいのに……。葉也は距離を少し置いたアリスの横顔を眺めているが……一目惚れってそんなものなのか？
「あの女はきっとストーカー犯の真犯人だ」
「いや、それは——」

口を挟んで死んだ魚のような目でこちらを凝視する深月先輩はアリスと僕を交互に見て、
「擁護したくなるのは、アレか？　彼女だからか？」
と指摘してくる。
「誰もそんなこと言ってないよ深月先輩！」
「まぁ、良いが。とりあえず俺はＫＦＫとＪＢＫを喧嘩両成敗にする役目がある。琴音先輩に変わって俺が部を受け継いだんだ……」
「え……」
部を受け継ぐ？　それも琴音姉から……そんな話は一回も聞いていない。
「琴音先輩に言わないで欲しいって言われたんだけど、琴音先輩はね……勇者伝説探求部を創設した……張本人なんだ」
これからＫＦＫとＪＢＫの第一次対戦の準備の最中、僕はこの勇者伝説探求部を創設した本人を知ることになったのであった――

「――もしもし、重人(しげひと)会長ですか？」
「これはどうも主様」
「主様って呼ばれるのは懐かしいわ」
「そうですか。それよりも今日は主様主催のファンクラブの全面対決を見に来ないんですか？」
「あたしには傍観者が性に合ってる、ただそれだけのことかしらね」

「傍観者、ですか。それよりも誰よりも勇者意識のある人間に〝あんな試練〟良いんですか？」
「大丈夫よ重人会長。ミユさんにはしっかりと誘拐されてもらったわ。それにね、重人会長」
「なんですか？」
「奇人の貴方には分かると思うけど、人を駒みたいに動かすってね、最高だわ」
「奇人のボクにですか……主様の弟はまだ剣道とも秋山ノビルとも縁が切れてないですよ？」
「話変わり過ぎよ重人会長。あたしが学園辞めた理由知りたがってたわよね？」
「答えになってませんよ主様。主様の辞めた理由を生徒会長のボクが知らない訳ないじゃないですか」
「それもそうね。学園を辞めた理由は、貴方と飯沼に問題があるのよ？」
「そうですね。飯沼は今日、顔を出してますよ？　あの女装家、売店のお嬢さんの格好でとうとう接触してしまいましたけど、大丈夫なのでしょうか？」
「えぇ、大丈夫。だってあの子はあたし達、橘家の〝勇者〟ですもの」

三話　前日談

「あら、何の用って顔してるわね」
場所は生徒会室。至ってシンプルな壁紙に中央に会長席と名札が飾ってあり、両サイドには役員の席がある。これがあたしの知っている条咲学園生徒会室。会長席に『奮闘』と言う赤いハチマキを額にして目元にクマのある重人会長へと話に来たのだ。
「いえいえ、ＫＦＫとして嬉しい限りですよ主様」
席を立ちあがり眼鏡を付けて立ち上がる重人会長。何気に身長高いんだよな、この人。奇人だし。
「それよりあたしが何故全身ジャージでここに居るって思ってるの？」
「巧妙な罠抜けトリック名人、幼馴染なんですからそれぐらい知ってますよ主様」
「えっとね」
そんな前置きを置いてあたしはついつい恥ずかしさで目を逸らしてしまう……。
「今日は”利業（りぎょう）”じゃないから名前で呼んで……良いわよ」
あはは、と腹筋が崩壊しそうなぐらい笑っている重人会長はどうやら含みが合って笑っているようにしか見えないのはあたしの気のせい、かしら?
「なんですかその表情。ボクの片思いの相手とは思えない表情ですよ。ボクに惚れ――」
「馬鹿!」
回し蹴りが見事に顔面へと入った重人会長は悶絶しながら、「酷いですよ」とゾンビのような枯れた声でいる。そのぐらい当たり前の始末よ。

「本題、入るわ」
「ど、どうぞ」
痛い〞フリ〟をしていた重人会長はエスコートするように椅子を差し出してあたしはそこへと座る……今、ぷぅ〜って聞こえたのは気のせいかしら……。
「すいません。ぷぅぷぅクッションって最高で……ほ、本題へどうぞ？」
「あら、痛いフリをして、尚もあたしへ喧嘩売るとは良い度胸ね。この変態ストーカー！」
「もう、酷いですねボクの片思いの人は」
「貴方、人間界からログアウトどころかシャットダウンさせるわよ？　その奇人ぶりな脳みそ解剖してあげるわ！」

「――さぁ、本題へ」
重人会長、いや重人は奇人だ。何をしてもヘラヘラ笑っている。今もフルボッコにしたはずで全身アザだらけなのにニヤニヤして人を小馬鹿にしている。それでも重人は小さい頃からあたしの無茶苦茶を影で支えてくれる人物だ。それは承知して友人としては一緒に居られるが恋人としては生理的に受け付けない。
「分かったわ」
この人は馬鹿だ。
「まぁ、橘君のことｏｎｌｙですよね？　さすがブラコン」
余計なひと言を付けるところが余計馬鹿を露呈している。だがもう怒りを通り越してスルー安定な気がするため話を進める。
「何でも良いけど、一つ……あたしの弟に関することだけど頼んで良い？」
「了解です琴音さん。でも見返りはあるんですか？」
だるいの始まった。さすが生徒会長と遠回しの皮肉も考えたが辞めにした。どうせ見返りはあたしに求めてるのに変わりは無いのだ

から。
「手料理、御馳走とかどうでしょうか生徒会長」
「奥さんの手料理……冗談冗談、そんな鬼の形相で睨まないでって。皺増えるよ？」
あたしが馬鹿だった。あたしの提案と思考もあいつの発想力も馬鹿だった。何してるんだあたしは。蒼汰のことを勇者って呼んでもらえるように、あの子のために傷を少しでも浅くして上げようと考えてるのに重人はそんなことをお構いなしな”フリ”をしている。

「貴方ね、少しは弟を心配するあたしの気持ち考えたらどうなの？　いつもフリばかりして他人の顔色疑って馬鹿じゃない？　何が生徒会長よ。この奇人！」
落ち着くんだあたし。怒ったら重人の思うツボだ。何もかも見通して馬鹿にしてくるあの重人だ。本当は”フリ”をしているだけで気にかかっているはずのしげ——
「そんなの考えたことなかったな」
「?!」
思わず立ち上がり重人の襟元を引き寄せて額に頭突きをするも重人は平然としてこちらを見透かした表情で見つめてくる。
「痛いじゃないですか～」
「嘘よ！」
「はい？」

「貴方だって……貴方だってあたしと同じ立場で、闘ってたじゃない！」
「五月蠅い貴方も僕は奇人なので好きですよ」
「だま——」
「いい加減にしろ、この糞ビッチ」
襟元の手を払われて堪忍袋の緒が切れたようなのか重人は冷静な口調であたしの口を片手で押えて、あたしの足は床から離れた。ど

う抵抗しても離れることは出来ない……。

「ボクだってですね、そりゃあ闘いましたよ。飯沼財閥（いいぬまざいばつ）のおぼっちゃんのせいでね」

――昔々、とても仲が良くて毎日が幸せな兄弟が居ました。家は決して満足して暮らせる豪邸なんかではありません。それに両親は仕事で忙しくて時には奴当たりをしてボク等を傷つけることがあっても兄弟が居たから支え合って生きてこれたと、兄のボクは自覚していました。”いつまでもこの幸せが続いてくれますように”と願いさえ毎日念じてボク等は生きてきました。仕事で忙しくてボク等に目もくれる暇もなく育児放棄のような状況で家庭裁判所や児童保護施設の方がお見えになってもボク等は笑顔で玄関へ迎えに行っては何の誤りもないという判断で返してました。息抜きといえば兄弟で遊んでるときだけです。両親が家を出て行ったときは解放感があり、両親が喧嘩をし出したらボク等は外へ外出して近くの公園で遊んでいました。いいな、他の子供たちは“親”に迎えに来てもらって。ボク等のお迎え役は毎日警察署の人でした。とある日、体調を突如壊した妹は不治の病にかかりました。細胞分裂が身体中いたるところで発生して次から次へと新しい皮膚が湧いてくる病気です。両親に気持ち悪がられて病院に行くのは毎日ボクだけでした。その日から二日が過ぎて妹は天国へ行きました。何もしてくれなかった病職員と両親を恨み、憎みいままで生きてきました。それからと言うボクは両親を包丁で刺すなどして殺害未遂で少年院へと運ばれました。そこで出会ったのは飯沼勇人（いいぬまはやと）で同い年の子でした。罰はボクと同じ殺害未遂で同じ末路を辿ってきたと本人は言いました。大人はみんな嘘つきで自分の”利益”だけを考える貪欲な人種と感じました。ましてや人間とは別の人種のようにも感じました。だから反

抗期真っ盛りのボク等は監督委員に迷惑をかけたりとやんちゃをしました。月は過ぎて行き、飯沼勇人は少年院から出れるのにボクのことを気遣ってボクと同じ日に出ようと考えたそうです。ですが次の日、彼の迎えにボクの父が来たのです。
『悪いな、重人。お前の親じゃないから今は赤の他人だけどな』
　血のつながりを拒否されたボクはどうやって生きて行くのかも分からない。最愛といっても過言ではない妹は先立ってしまった。ボクに残された道はどこにもなく……生涯孤独で……あまりにもリアルすぎる現実に僕はただただ現実逃避をするのでした。

「ボクはね、大人なんかになりたくないんですよ」
　襟元から解放されてあたしは床へと足が付き、腰が抜けたのか椅子へとちょこんと座る形になった。妹の話は細胞分裂に耐えきれなくなった身体だけじゃない。細胞分裂を発作させるように両親あるいは重人自身が薬を飲ませた――それぐらいの話。
「あんな嘘つきな人種には、えぇ、なりたくないですよ。別に琴音さんの弟を気にしてないなんて話嘘ですよ。ボクの場合は現実逃避のために妹と遊んだが事実ですが」
「あたしの予測だと、重人が薬を飲ませたが割に合ってるわ」
「犯人断定ですか。まぁ正解ですよ。誰よりも先に次の人生を妹には味わってほしかった。何もかも妹のために尽くしたボクが報われないのも世の定理ですよね」
「誰かのためにが、全て正解じゃないわよ。貴方の場合は……”歪んでるわ”」
「褒め言葉、ですよ……ボクにとってわ。それに」
「それに？」
「琴音さんだって弟のために動いてるじゃないですか。それは誰かのためでしょ？　みんな誰かのためっていうだけで自分を擁護してるんですよ」

「……そうかもね」

「とりあえずボクの話と”誰かのために”は保留で手伝ってほしい内容どうぞ。”誰かのために”は保留なので今ならその”誰かのために”の言葉を聞きましょう」

「分かったわ。じゃあ蒼汰に勇者を再認識させて。あの子はあたしと貴方と同じで誰かのために動こうとする子なの。失敗したら全部抱え込んで潰れちゃうんだ……」

「了解です。そうですね、手料理が報酬なので”オムライス”明後日注文しますね」

「分かったわ。場所はどこでやるの？」

「遊園地ですよ。あそこに誘き寄せるためにあらかじめ、今日の放課後に勇者伝説探求部の成瀬部長とＫＦＫのメンツとＪＢＫのトップの萌香にボクが連絡入れときますね。皆さん、久々に琴音さんの通達で動けてさぞかし御満足でしょうね。ボクが一番満足できそうですけどね」

「わかったわ。また明日連絡入れて……」

帰り際に席を立って携帯電話の番号とアドレスが書いてある紙を席に置き、あたしは生徒会室をあとにしたのだ——

四話　第一次対戦

「……この対戦、終わったら話があるの蒼汰（そうた）」
「僕もだよ、アリス。じゃあ、行ってくるね」
売店で深月先輩からはミユからの連絡手段を探してと言われていたが……一つ僕は何か間違えていたのだ。アリスと久しぶりに対面したのは今日だがアリスは、小さい頃と違っていた。違いは幼馴染だから分かる違いであって外見の可愛いというのとは別。何か知らないうちに成長しているように感じて感化されて僕自身の間違いに気付いた。
それは行動すべきところで行動できる力だ。何もかも今まで琴音姉に頼り切っていた。だから僕も成長しなければ周りに迷惑を掛けてしまうんだ。手を振り売店を後に僕はミユ捜索をすることに決めた。

——ぶぅーぶぅーぶぅー、そんな音がジーパンのポケットから鳴り響き慌てて取り出す。非通知のようだ。電話に出ると変声されている。イタズラ電話に思えたが「オマエノダイジナヒメヲアズカッテイル。タスケニキタケレバジェットコースターデイリグチマエニテ、キサマヲマツ」で途切れた。

「ではみなさん、静粛に」
ジェットコースター出入り口ではジェットコースターマニアなのかタイガーマスクを付けて集合していた。丁度良く落ちていたタイガーマスクに感謝御礼だ。いやジェットコースターマニアというよりかはタイガーマスクマニアの間違えって思ったのも内心で止めておこう。出入り口では片手にマイクを握った全身ジャージで仮面ライダーシリーズのお面を被っている奴が仕切ってるのか。ん、全身ジャージ……。

「これからＫＦＫとＪＢＫの第一次対戦『根性見せてみろー馬鹿野郎』をここにて開幕する！」
それぞれの思いで発狂する人で溢れかえってその全身ジャージの奴が見えなくなる。みんな、はっきり言えばファンクラブと同性愛ラブの人間の対決だよなって思うのは僕だけなのだろうか……いきなりの脱力感に気分を害するのであった。

「ＫＦＫ会員番号三番橘蒼汰！　準備しろ！　ストレッチしろ！　姉の可愛い部分をジャットコースターで何個言えるかが勝負の采配なのだ！」
待て、この人自分で姉って言ったけどそれって僕が弟だからなのあ、どっちなのか気になる。慌てて前へと人を掻きわけて進み、出入り口にはまさかのミユが縄で腹部に時限爆弾を乗せて気を失っていたのだ。

「さぁ、ここで問題ダヨ。大切ナ姫ヲ守レルカナ。タイムリミットハ一〇分三〇秒ダ。帰ッテ来ル間ニ、大切ナ人ハドッカーンダ。ワタシガ勧ルノハジェットコースターニ乗ッテコレヲ宙へ投ゲ捨テルコトダ。サァ、ドウスル？」

あぁ、もう無茶苦茶だ。いきなり会員番号三番扱いだ。え、後ろで「え、オレ三番なんですけど……」と悔しがる人が居るんですけど。ちなみに変態ナルシストは、「ボク、高所恐怖症なんだ、ハハ」とのこと。ストーカー犯である自覚こいつにはあるのだろうか。そして早くもＪＢＫにポイントが一点加算された。ジェットコースター耐久レースで最後まで琴音姉の良い所を言い続けなければいけないレースで三人選出で一回戦が一ポイント、二回戦が二ポイント、三回戦が三ポイントで二回負けても最低引き分けだ。そしてアンカーのような僕は二回戦を出入り口のスクリーンで眺めているがどうやらＫＦＫの圧勝だったらしい。ＪＢＫのメンバーは緊張のあまり

下痢で出場をやめて二ポイントをＫＦＫは頂いて二対一だ。これで三回戦の僕が勝てば……。そしてジェットコースターで勝負とはなんとも斬新な考えをしているんだろうか。

「オマエハタダカツダケジャナイ。ソノヒメヲキュウシュツスルノモフクメテ、ハジメテポイントガエラレルノダヨ」

「上等。家族の絆といままでの僕と勘違いしないでよね、”琴音姉”」

周りは予想通りにざわめき始まり琴音姉が扮する全身ジャージの仕切り役へと近づいて囲んでいる。縄で縛られている僕はＪＢＫが見ている中でミユをジェットコースターへ乗せて発車のベルが鳴る。

「ミユ、起きて！」

横から肩を掴み、揺らすもミユの腹部には時限爆弾……この形……小さい頃、琴音姉と誘拐されたときに見たものだ……プラスチック爆弾なのか。※一、信管(しんかん)はどうやら起動したら取れずじまいの構成だ。逆に言うと人間の手で剥ぎとれる代物じゃないことも確かだ。

『無駄デスヨ。呼ビ起コシテモ睡眠剤複数使用サセテイタダイノデ』どこからか聞こえる琴音姉のカタコトな日本語。睡眠剤複数使用はさすがにやりすぎだろ。何の恨みがあるんだよ……考えても仕方がない。僕はひたすらにミユの身体を揺さぶる。……アレ、今、目が微かに開いた気がするぞ？

「ミユ、起きた……のか？」

頬を擦り、ミユのスカートの右ポケットへと手を入れる。くすぐったいのか跳ね起きるように目覚めてしまった。そして時限爆弾は起動をし出すのだ。

「ちょ、ミユ！」

「えぇー、私のせいって……なんじゃコリャー！」

時限爆弾と腹部で御対面のミユは本気で驚いたのか、「死ぬの嫌……って、ジェットコースターもきらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」そんなことを言ってる間にもジェットコースターは僕達をカクテルのように上下をし出すのだった。

「……えっと、一応時限爆弾処理は出来ました、はい」

未だジェットコースターに揺さぶられてる僕とミユ。一番大切な事をまだやっていなかった……、琴音姉の事についてジェットコースター中にたくさん言わなきゃいけないということだ。ちなみに時限爆弾は動いたまま宙へ放り投げられた。主な理由は空気の抵抗で下がるときにミユの腹部からポロリと取れてどこかへ飛んで行ってしまったらしい……本来ならダメな気がするがなんともまぁ、変態ナルシストがキャッチをしたとメールであった。

「蒼君……ようするに……ラストの、うっく、あ、あの下りで思いを叫びましょうか……あはは」

ミユは苦笑いで笑顔を見せているが、どうやら一回目の下りで酔い潰れてしまった僕等にとっては過酷な物であった——

四話　第一次対戦（後書き）

※一　信管（しんかん）とは爆薬を起動させるための装置です。

五話　後日談

「……手紙は気にしてない、だから蒼汰はアリスを好きになって」
ファンクラブ同士の抗争、第一次対戦はＫＦＫに軍配が上がり無事に勝利を収めてから、アリスに言われたとおりに彼女の話を聞いた。アリスからの話はラブレターの事件の事は気にしてないらしく、僕はアリスを好きになるのが条件らしい……一嵐きそうなのは気のせいだろうか？
僕からの話は勿論、転校したせいで有耶無耶になっていたラブレター事件の事を謝ろうとしたのだが謝るタイミングが無くて、結局アリスには何も言わず終わった。
「……課題、捗（はかど）ってる蒼汰（そうた）？」
忘れていたが条咲（じょうがさき）学園には特別授業という枠があり、授業を休んだ生徒への制裁、もとい課題プリントを提出しなければいけない。このルールは昨日の帰りの電車で宣告をされた。遅い且ツッコミを入れる気力がなかったのは自分でも思うが盲点だった。そんな課題をしている場所は勿論、特別授業を担う生徒指導部であることから生徒指導室である。監修は一人ついているが一年Ｂ組の生徒数二名が対象なあまりにあの女担任がついている。うん、明らか僕と葉也のせいだ。時間帯が朝の五時半というだけあって眠さと昨日の疲れからまったく捗らない事実。
「アリスはどう？」
「……彼氏を支えるのが彼女の役目。アリスは終わって無いけど頑張る彼氏の横顔を見たいのが上回ったの」
終わって無いのか……ワンチャンス、書き写しできると思ったのに。そんな僕の考えとは裏腹に『彼氏』『彼女』という単語に敏感に耳を立てているミユと深月先輩。みんな横一列に折りたたみの青い椅子へと腰を掛けて折りたたみの茶色いテーブルへと課題を乗せ

て一生懸命にペンを走らせているのだがおよそ三名のペンが止まってることは確認できたぞ。ミユ、深月先輩、アリスはペンを止めてそれぞれに不可思議な行動を取っているではないか。ミユは席から離脱をして僕の後ろへと回り、アリスの過度な露出を指摘している。確かにセーラー服からは少し大人の色気が出ていた……。深月先輩は僕の左横の席で、間接的に手の指に訳のわからん技を掛けていて何気に痛い。アリスは勿論、ミユからの指摘を無視して長い黒髪をサイドポニテへと縛り直して僕の太腿（ふともも）へと手を伸ばして弄り始めている。もう何もかもが訳のわからん状況になりつつあるのであった。

――拷問という拷問が終わったものの女性陣からは引き続き拷問のようなものを受けて精神的にボロボロだよ、まったく。平日の五時から八時、三時間に渡る拷問は正直窺えないものだ。ミユは身体が弱いって深月先輩が昨日、電車の中で言っていたことを思い出して気を遣うものの、「だったら心臓を落ち着かせるために秋山さんは蒼君から離れるべきだと思います！」とのこと。引き剥がそうとするもののアリスは、「彼女のご奉仕を無駄にする彼氏はいない」と抵抗をして追加で「彼女が居る蒼汰に色気仕掛け、良い度胸ですね先輩」とのこと。色仕掛けと言えば胸以外でしか行えないミユのことは余計に心配である。まぁ、親心って奴なのか。

「おはようございます橘君」

「早いですね～橘君」

えっとアレだ。一年B組の教室の中に入ってきたのは拷問組の葉也と生徒会長の浦安重人（うらやすしげと）である。重人の手の中にはオレンジジュースが二本。

「暑中見舞いです」

季節は春だろとか思ったが思わぬことに呆けていた僕は返す言葉

がなく、重人は手の中にあるオレンジジュースを二本こちらへと投げてきて、「それでは一旦ａｄｉｅｕ」と捨て台詞を吐いて何故か全力疾走で食堂へと走って行ってしまった。葉也と目が合いお互いに首を傾げて苦笑いしている間に廊下を団体で駆ける足音が聞こえ自身のように床が揺れて、ふとした瞬間に女生徒達が重人の走って行った食堂方面へと駆けて行く……まさかとは思うけど重人ファンなんて言わないよな、アハハ。

「そういえばですね橘君。……黒髪美少女様が廊下で待っていますよ？」

黒髪美少女様ってとんでもないあだ名をつけられるのはモチのロンでアリスだ。葉也はきまづいのか曖昧な笑みを浮かべて廊下側を差している。おもむろに立ち上がる僕に催促のように、「さぁさぁ」と言葉で流している。葉也がきまづいと僕も自然と葉也の仲を気にしなくてはいけない連鎖被害が起きるため、「そんな顔しないでよ葉也」と笑顔で励ますと共に「ただの知り合いだけだからな」と付け加えて廊下に出たのであった。

「……蒼汰、遅い」
「ごめんアリス。ところでどうしたの？」
僕は廊下で棒立ち状態のアリスへと謝りながらもここへ来た趣旨を聞くことにした。アリスは制服のスカートのポケットから『入部希望』の封筒を取り出してこちらへと差し出してくる。手に取る僕は、「まさか？」と思わず生唾を飲みそんなことを口にする。だって驚きなんだもん。
「……うん、アリスは『勇者伝説研究部』に入る」
照れ隠しなのかアリスは封筒を受け取ってもらったのを確認して頷きながら僕の頭目掛けて頭突きを繰り出すのであった――「ぎゃああああああああ！！」

「――人間の限界って知ってるっけ主様は？」
「利業以外だから普通に言いなさいよ」
「生徒会室に居るんだから誰に訊かれてるのかも分からないんだからしょうがないよ主様。ボクはいつだって監視される立場なんだからね」
「それもそうね」
「なんか食べてるの主様？」
「別になにも。なんでよ？」
「なんか言葉に詰まってたからさ」
「……そうか。結局勇者って言うかチキンと成長してる気がするわ」
「唐突だけど主様は弟ラブだから弟君の事だよね？」
「弟ラブで何が悪いの？　そもそも貴方って人は」
「あぁーはいはい。弟ラブはボクも重々承知さ。だけど敢えて言う、『こんな楽しい用事にボクも混ぜてくれてありがとう』」
「話遮って……まぁ、楽しかったのはちょっと同意かな。でもジェットコースターで最後の下りで『ごめんなさい！』って叫んだのはちょっと誤算ね。『琴音姉愛してる』がベストアンサーね」
「琴音姉愛してる」
「殺すわよ？　今ならデコピンで貴方を殺せそうだわ」
「物騒だなー。ボクの妻は鬼嫁になりそうだ」
「だ、誰が貴方の嫁よ！　馬鹿！」
「ツンツンデレデレすぎるな〜」
「もう……取り敢えずお手伝いありがとうね」
「……うん」
「どうしたのよ、いきなり黙りこんで」

「いやちょっとね。そういえば主様はこれから弟君の部屋に籠るの？」
「そうね籠るわ」
「過激なのは画面越しだけだよ？」
「弟なんだから問題ないわよ」
「弟なんだから問題有る気が……」
「ん？」
「い、いやなんでもないよ」
「ふーん。また今度……手伝ってね。お礼の肉じゃがは蒼汰に持たせて明日向かわせるから」
「了解。朝だけどおやすみ」
「そうね……書類処理も終わったし寝る。おやすみ」

——ツーツー、電話口からは電話を切ったあとの音が聞こえて携帯電話を閉じる。今回ボクがあのお遊びに加担をしたのは第一に琴音さんが居たからであったことと琴音さんが作った『勇者伝説研究部』のメンバーが居るからだ。誘拐したのもボクなんだが一つだけ誤算はあった。あの飯沼勇人(いいぬまはやと)が潜んでいたことだ。そのことをボクは今後警戒線を張らなきゃいけないのもまた事実。飯沼勇人はボクの父を金で買い取ったおぼっちゃまだ。そんなアイツの間抜けな顔が一日でも早く見たい。琴音さんと一緒にアイツの全てを暴いてや——バキッ

「癖が出ていらっしゃいますよ浦安会長」
「あぁ萌香(もえか)。今日は朝に何の用事もないだろ？」
生徒会室にいたのは赤髪ポニテで似合いすぎる眼鏡をかけている端正な容姿の癖に何故か男性の同性愛に趣味を持っている入澤萌香(いりさわもえか)だった。そしてボクのいつもの癖というのはなんでも握り潰してしまう癖で今は握っていたシャープペンシルが被害を受けたらしい……。

「話を逸らして……浦安会長は。それウチのお気にのシャーペンやったのに」
そして彼女のもう一つの難癖は怒ると関西弁風な喋り方をすることだ。地方の人には気に居られると良いものだ。って痛っ！
「聞いてるんですか浦安会長？」
「聞いてるから耳たぶを離して！　一回そのピンセットから離脱して！」
強制離脱を計ろうとも困難すぎることに白旗を上げて降伏をしてピンセットを取り外しての彼女の一言は惨かったのである。

「……浦安会長は女たらしすぎます」

——あぁ、昨日の書類整理を頑張る一存であります。

side story ?~専属メイド・レーデル

平日、それは学生であるはずならば通うべき場所がある。それは学校。社会の基本を身につける場所としては最適な場所であり尚且つ恋愛の場としても一目置いておける場所だ。そんなところに私はお嬢様からの許可を得て学園内で入澤萌香（いりさわもえか）に扮している。赤髪とポニーテールがトレードマークでひそかに大切にしている異性たちの同性愛を語る薄い本を持参しているのはお嬢様専属メイドのレーデルとは違う。そう私は自由。自由に恋愛も青春もできるのね。そう考えると胸のドキドキが止まらないのは秘密だ。今は転入から二年が経ちお嬢様と同じ学年で過ごしているがお嬢様は気付いていない……それとも気付いてるけど無視、無い無い。

そして私がお嬢様以外に気になって仕方ないことは橘蒼汰（たちばなそうた）。そしてお調子者の浦安会長。この二人は似ているように私は感じた……なんとなくだが。

二人を見ていると癒されるというか飽きない。特に蒼汰に至っては毎度毎度のツッコミが楽しいというのもあるしな、うん。浦安会長は女の敵で楽しくは無いけど面白い。面白いだけで決して何も思ってはいない……ほ、本当だからなッ！　って私は誰に話してるのでもなく廊下の窓ガラスを恥ずかしげに叩いていた……。

「入澤どうした？」

「佐藤先生？！　な、なんでもないです！」

気付いたら社会科担当する学校生粋のエリート大学出身の二四歳男、佐藤和乃（さとうかずの）先生って説明長いな……。私は振り替える間際にあの例の”執事流記憶消去術”を実践しようと佐藤先生の首元を両手で掴みスカートがたくしあげられながらも佐藤先生を吹き飛ばすのに成功――「ぎゃああああああああああ？！」

——悲鳴なんてソラ耳ね……きっと。

「——萌(もえ)〜、一緒に帰ろ〜！」

教室に最後まで残ったのは私と親友とも言うべきなのか越谷優子(こしやゆうこ)。彼女は生徒会執行部の人間で副長を務める十年に一度の天才と誉め称えられていてプライドが高くて……知ってる限りでは王道のツンデレで、お嬢様の親友の成瀬さん並みの口の悪さは私だけの秘密という吐露。容姿は学年一可愛いと言われているお嬢様と互角の可愛さを持っていて、男の心を読んでいるのか手で可愛い仕草をして同性には若干引かれていて……いやここまで来ると陰口モードだからやめておこう。私は会計ノートに黒のボールペンを挟み、閉じて適当にと返事する。

「萌も大変よね」

「なんでユーコは私の胸を見て言う」

ユーコのオヤジ的視線はどうやらこの慎み過ぎた私の小さな胸を制服越しで見つめていて腕の鳥肌が勢いよく立った。視線を反らせようと片頬を勢いよく押して、本来なら逆方向を向くはずだったが……、

「ギブ、ギブだって！」

思わず鼻の穴へと指が突き刺さり緋色の血がチロリと……。思わぬアクシデントに鼻笑いをしてしまい、何を思ったのかユーコは指を穴からはずして私の背後へと回る。

「ちょ、ちょっとユーコ？！」

勢いよく下から押し上げられた胸に周りからの男子生徒からの視線に気付いた私は”執事流記憶消去術”を使いそうになったが考えてみろ萌香……相手は親友、一世一代稀に見る私の親友……傷つけ

るわけには……。
「淫らな萌も可愛――」
「すいません先輩。ついつい強制的にされてしまってるのかと思い助けてしまいました」
萌香はプシューっと空気の抜けたのように頭にコブを作り昇天をしている。勿論、私の目の前には黒髪で特徴が無さ過ぎて表現できない後輩が土下座をしている。私は正直有り難くて、私を見ていた男子生徒はどうやら溜息をもらして去って行ったがどうして同性のこういう絡みを好むのか男子生徒の気がしれてる……男同士なら何も問題ないのだけどね。
「良いわ別に……」
「どうしたんですか先輩？」
ハッと我に帰る私は顔を俯き、たった今マジマジと目の前の男子学生の顔を確認及び認識をしたが……、蒼汰だったとは！　嫌な汗を掻いてるって私変だなぁ……別にバレても何が起きる訳でも……、
『僕にメイド服でご奉仕してくださいよレーデルさん！』
「で、でも……きゃ！」
『ではご奉仕は僕から』
「んな訳あるか！」
顔を上げて、思わず叫んでしまい口を封じるように両手で覆い深呼吸をする。蒼汰はいつもどおりの表情で私の叫んだ意味を理解せず頭を傾げる。って理解できる訳ないか……お嬢様が大好きなのも気付かないで鈍感でシスコンだからね。
「先輩、僕これから冗談言います」
「は、はぁ……」
どうしたことか頭のねじが吹き飛んだのはこんな状況で私だけでは無くて蒼汰もだ、そうだ。いきなり得意げな顔つきに変わり思わ

ず拳が唸るところであった。執事流顔面崩壊パンチと名付けよう、そうしよう。
「えっと……先輩ってもしかしてレーデルさんだったりします？」
つまらねぇぇぇぇぇぇぇ！　こいつの冗談つまらねぇぇぇぇぇぇぇぇ！　なんで、なんでなの？！　お嬢様の好意に気付かない癖にこういうどうでも良いことに敏感な変態男子高校生主人公ってどうなの！？　蒼汰は主人公失格で明日から主人公は始まってから作られた岩槻葉也を使えば良いと思うよ！！
「あはは……冗談オモシロイ」
「先輩目が虚ろで棒読みになってますよ？」
ふとおでこへと触れる蒼汰の片手。驚いて身を引くが勢い余って蒼汰が私の上へと覆いかぶさってきた……。
「痛っ！　先輩大丈夫ですか……ってなんで目を瞑るんですか！」
「痛いのは覚悟してる……」
待て、私。どうしてたった何分前にあった女とやろうという蒼汰が居るって想定なんだ。あっちがまだ私の事を知らない……だったら、
「脱ぐ」
「えぇー？！」
「嫌か？　まぁ、胸は小さいけど我慢してって……なんで目をつぶるのよ」
「し、失礼しました！」
上から立ち上がり蒼汰は勢いよく食堂側の渡り廊下へと走って行く。少しメンタル面でショックを追ったぞ私は。

暫らくユーコを背中に乗せて寝込んだところの廊下から引きずるように運び女子寮へと辿りつく。荷物になっているユーコを私の部屋のベットへと置いて行き夕飯を自炊のためにと買い出しへ出ることにした私は財布とスクールバックと花柄のショルダーバックをチェンジをして郊外へと足を踏み入れることにした。あたりは春から

夏へと移行しようと言う五月初旬。あたりは六時半で夕空が碧暗（あおぐら）い。心臓破りの坂を下ると商店街が右側にあり左側には大手メーカーのデパートがあるが私は勿論、お嬢様曰く『庶民派を選ぶ』のは変わりないこと。これではレーデルになってしまうけど素の萌香もこっちを選んだと言うことにしておくわ。

ｉｐｏｄを通してイヤホンから聞こえてくるメロディに私は癒されながらの買い物。今日の夕ご飯は相部屋の子が作ってくれると言うことでメモ帳の切れ端を渡された。一番気になった具材は「アミノ酸」。これは……楽しみだ。

買い物は殆ど薬局で済み、帰りの帰路に切り替えて歩いている途中に不意に公園で泣いている十歳ぐらいの男の子が居た。メイドたるものご主人様以外に使えるべきではない、そうは言われてもこれは萌香、私自身だからご主人様も何も関係ない……小神家の人間にバレたらどうするかは後で考えよう。元々この学園に入ったのは影護衛と呼ばれるものだからな。

「だ、大丈夫君？」

ベンチに座り泣いている少年の隣へと座り話を掛けるとこちらを向いて、呆然とする少年がそこには居た。服装は普通に長袖短パンと春から夏にかけての小学生らしい格好。特に怪我などもなくただ少年は泣いているように私には見えた。

「お、お姉ちゃんは『如月魔法探偵事務所（きさらぎまほうたんていじむしょ』の人？」

なんだろうか。少年はやけに長い探偵事務所の名前を自慢げに言ったように聞こえた。私が舌足らずと知っての狼藉だろうか。そんなことより如月なんとか事務所のことはスルーで。適当にうんと返事を返して少年は涙を止めた。

少年は不安げな顔ではあるが先程よりは〝生気を取りも出したような顔色〟をし出した。私も自然と止まっていた皮膚呼吸も活動し出したよ。

「じゃあお姉ちゃん」

上目遣いで訴えてくる少年。あぁ、もうそんな無邪気な目で私を見ないでいただきたい。お嬢様もそんな顔で見つめてくるときは嫌な予感しかしないがこの少年にやられると悪い気がしない自分が居る……。って私は萌香だから今はお嬢様は関係無くて、えっと……関係ない。
「何？」
引きつり笑顔で返事する私にお構いなしに少年は碧暗（あおぐら）い空を差したかと思えば木に引っ掛かっている風船を差していた……嫌な予感しかしないわ、やっぱ。

――さて、ここで蒼汰に言われた女性似非執事というレッテルが本物と言うことを証明してしまうのか……。私は実にヘタレ的（いや、女子と言うのは本来こういう物だよな）に木の上で腰が抜けていて太い木枝に抱き着いている状態。ベンチの上には少年が靴を脱いだのか裸足で立って指先で指示をしてくれるが……取れるか馬鹿！　いや待てよ私。執事たるもの全てが完璧じゃないでどうする……。
「って私はレーデルじゃない！」
ハトの泣き声が聞こえてくるのが無性に寂しくなるなぁ。まるで私がスベった芸人扱いじゃないか。岡●みたいにスベった後も試行錯誤しなくてはならないのは執事である私にはってだから違う！
「どうしたのお姉ちゃん？」
「大丈夫、私は私で私は執事で、えっと……あぁーもう、執事で良いや」
「？」
首を傾げて謎めく男の子に私は愛想笑いをしつつスカートの中へと来る風に驚き急いで手で押さえる。目先にあるピンク色の風船。手に届きそうで届かない悔しさ。余計になんかお嬢様の気持ちが分かってしまう。こんな感じに想いが届きそうで届かない蒼汰の鈍感野郎とかお嬢様は思っているのだろうか……ついつい笑ってしまう

が今は自分の状況の方がよっぽど笑えるって話だ。男の子曰く「下に降りられない猫」とのこと。良く言うもんだ……泣いてたくせに。

「そういえばお姉ちゃん優しいね」

「そーね。執事だったら貴方のことを微塵切りにしてたところ」

「執事ってお姉ちゃんなれるの？」

「完璧に最後の一文無視しやがって、畜生。私だってなれるわよ。大体お嬢様の恋する相手が馬鹿すぎて面白いけど……君はなるんじゃないぞ。なったら君を含めて三人の男をお嬢様の目の前から消さなければならないからな」

「鯉？」

「多分小学生らしい漢字変換だと思うが恋だ、恋。異性を胸が苦しくなるほど愛してやまないことだ」

「お姉ちゃんはあるの？」

「私は……」

我に返り今は木の上＝自分の体重＋地球の重力＝私落ちる。脆（もろ）かったのか甘くヒビの入っていた木の枝はパキッと不吉な音を立てて崩れて私ごと床へと急転直下するのである。勿論地面へと直接落ちたら骨折れる高さ。私は運良く助かったのか執事で良かったと自覚する瞬間であった。身軽に地面と着地をして木屑などを払う中、少年はそのベンチから消えていた。私は仰向けになり碧暗い空を見上げてみた……星綺麗だな、の感想の前にここ公園なんだよなぁがただしい反応だ。私は一体……恋をしているのだろうか。青春の醍醐味を私は味合うことは出来るのか……出来なそうなときは蒼汰か浦安会長にでも手伝ってもらうとするか……。

「――あぁ、あそこの公園って男の子の霊がって萌？」

撃沈する私を励ますユーコにルームメイトの柏八木（かしやぎ）さん。あの男

の子の真相を知った私は翌日、生徒会の担当の先生へと話をすると
どうやら恋愛成就するようになる座敷わらしのような霊とのこと…
…夏でもないハズなのに死ぬ寸前の思いをした甲斐、あったかな。

一話　勇者伝説探求部×部員共

——休日、日曜日。学生ならばやり終えてない課題、その他もろもろをやる日。そんな暇を持て余した学生の僕は部屋に籠ると言う選択肢を取っていたハズなのだが……。

「蒼君、私、家出したの」
唐突に僕と葉也の相部屋の戸を足蹴りでどうにかしてしまったミユ。二人っきりでの問いかけ合い、という部分では少々苦手意識がある僕。いつもミユと話すときは第三者が居て、会話を盛り上げてくれる人物が居るのだが珍しく誰もいない。理由としては補習。あるいは執事のお仕事。以上の二点が挙げられる。そして寮があるのに家出とは如何なものか。
「家出と言ってどうして荷物が無いんだ？」
「寮だからじゃん」
荷物を持ってないことをその恰好から捉えて指摘。そして正論のような答え。家出、そう、それは家を出ると書いて家出。何か、いや普通に意味を吐き違えている。自分で分かっといてその発言は、さすがミユとだけ言っておく……心の中で。
「ミユ、それは家出とかじゃなくて」
「知ってるよ！　ただ……私はね、その……」
メイド服。それはインパクト的な格好だ、とでも言っておこう。基本カスタマイズされているメイド服。そして下はミニスカート＋黒ニーハイソックス。何が言いたいかと言うと、僕の目の前にスカートの丈を気にしないで座り、上目遣いで見てくるミユが居る、と言うこと。正直、スカートと黒ニーハイソックスの絶対領域へと目が移ってしまう……。
「な、何？」
少しの挙動不審な僕の首の動きに、何を思ったのかミユは片手で

口を押さえて微笑む。そんな仕草に僕がグッ、ときてしまうのは軍事機密事項より秘密に隠しておくよ。ミユは「えっとね」と紡いで、耳上のサクランボのリボンを右手で弄りだして尚更、『可愛い』と思ってしまう自分が居る。

「蒼君と……一緒に——」

最後の一言が聞こえずに、「蒼汰。朝飯作りに着てやったぞ」とどこぞの空気を読まない横暴な深月先輩が声のボリュームを抑えながらやってきた。さすがに男女交際禁止令とかあるからなぁ（刑罰は遊園地事件の章、参照）。上下緑ジャージの深月先輩。学年色とでも言っておこう。ついでに一年の学年色は青。琴音姉が毎日、飽きずに着ている赤ジャージは三年の学年色である。

「なんでここに……ミユが？」

勢いよく無言で立ちあがったミユとは裏腹に破損済みの部屋戸の目の前で目が泳ぎ動揺する深月先輩。どうしてもこういう小さな仕草フェチ、が個人的にツボで可愛らしく見えてしまう……勿論、いつもは可愛らしく見えないなんてとてもじゃないけど、口が裂けても言えない。ミユは口を、餌待ちの鯉のようにパクパクしている。動揺しまくりのミユは深呼吸をして、胸を撫でおろして一言。

「い、家出したんだ……蒼君がね！」

ミユはニヤニヤデレデレな笑顔で僕の方へと右人差し指を差す。それよりも僕の深月先輩への好感度というか、何かが確実に下がった、あるいは距離が離れてしまった気がする。深月先輩、思いっきり引いた目でこちらを見てくる。要するに、凄く眩しそうな顔でこちらを凝視。

「へぇ〜。良い度胸だな蒼汰」

乙女の笑顔、そう見える僕の眼球は腐敗している、絶対に。不意に聞こえてくる骨の音。バキバキ、ゴキッ——どうやら僕の右腕の関節は自由な方向へとって、ぎゃあああああああああ！！——

「新入部員？　はぁ？　俺は認めない」
先程の事は僕が、金属バットで尻を深月先輩の常識の範囲の優しさで殴って解決をした。告訴問題だが、正直、法廷より深月先輩の方が恐ろしい。そして、一週間程前に大和撫子のような容姿の幼馴染の秋山ノビル、自称アリスから言われた入部の件について、この場を借りて言ってみたら、予想通りの反感を頂いた。僕と葉也の部屋、それ自体は変わらないことなのだが女子二人のおかげとも言うか男くさくは無くなったなぁ、という感想。女子陣は僕と葉也の勉強机の椅子に座り、僕は床に尻をつけている。
「深月先輩は僕を勧誘するときに言ったじゃないですか。部員募集中だ、って」
一応、食いついてみるが、「却下だ」と言う言葉で撃沈。昨日、アリスから催促されてしまって入部の方向で話は勝手に進んでいたがこれが現実だ。血も涙も唾液も無い深月先輩の無意味な権力が発動されている件について。深月先輩は銀髪ツインテールをブンブン、横へと頭ごと、動かして僕のドライアイ気味の目へとダイレクトに攻撃を仕掛けてくる。
「痛いです先輩！　い、痛っ！」
二目、同時攻撃に耐えきれず蹲(うずくま)る僕。そんな僕の背中へと勢いよく平手打ちがかまされる。
「痛！　ほ、本当に痛いですって！」
「とりあえず、お前は俺を嫁にしたいって言ったから、これ以上、敵もとい女子を誘うなんて言語道断。浮気とみなすぞ蒼汰」
顔を上げる僕に、すぐさま右人差し指を突き刺してそんなことを発言する深月先輩。誰も深月先輩の所有物になったつもりは無いのだが、そのツッコミを入れる暇もなく「う、浮気!?　も、もうそんな中……だったんだ」とミユが呟く。待て、そもそもなんで敵＝女子なのかが理解不能だ。

「ちょっと待って！」

二人のやり取りにけん制を入れるように言ってみるが、こんな言葉で収まる方が逆に凄いさ。尊敬の類だ。二人は僕を驚いた表情で見つめてくる。そんなに驚愕した出来事だったのだろうか。

「えっと……」

切り出しにくい点はあったがそこは勇気を振り絞り、声を発する……。

「とりあえず、アリスを入部させるかの話なんですけど……」

その言葉に深月先輩は頭の上で豆電球が光ったのか、ニヤニヤした顔、もとい笑顔で、「蒼汰」と名前を呼び、話しかけてくる。顔が「良いこと思いついた」と物語ってるのは言うまでもない。いつもの得意げな仁王立ちで僕の目の前に立ち、今日二度目の節穴錯覚をいただいたのである。

「……蒼汰からアリスの部屋に出向く……珍しい」

女子寮というのは専ら部屋に男が入室するのを校則違反とみなすのだが、本来は会話すら駄目じゃなかったけな。職場恋愛もそりゃあ人間だから先生たちもするよな、そりゃ。何の用事でアリスの部屋へ来たかと言うと深月先輩のあの小悪魔のような顔での、「入部テストするからな！」とのこと。動くアトラクション女こと深月先輩の言うことだ。きっと意地悪の様なテストにするのだろう。中学の時の話だが、バレンタインデーに義理チョコを琴音姉と深月先輩から貰ったのだが、ホワイトデーに琴音姉だけにお返しをして中学卒業まで、次の日から毎日のようにチョコが下駄箱へと置かれる始末。それも賞味期限が毎回、一日切れてる奴。こういう面から考えて深月先輩はどんな些細な出来事でも復讐する際には後先考えず、復讐する悪癖があることが分かる。ミユと事故でキスしたときも怒号の後の殴りの連発。徹底的に相手を潰そうと考える深月先輩のことだ。

「——あ、アリス。今、平気？」

「蒼汰？」
「う、うん。ごめん、ボーッとしてたみたいで」
「……気にしてない。そうだ蒼汰」
部屋戸を半分開けて覗いてくるように接していたアリスは不意にその白い手で僕の手首を掴み、「……疲れを取るのも彼女の役目だからね」という理由をつけて部屋へと力強く引き入れようと手首に力が入ってくる。僕は抵抗するように、部屋戸の横にある電気スタンドを掴む。だが彼女の力は異常に強く、あっさりと部屋へと入ってしまった。あぁ、僕はこの後の生徒指導部の先生方に叱咤されるのは言うまでもなく、諦めた。

さて、本題に戻ろう。
僕は深月先輩に入部テストがあるという告知だけ、しろ！　そう言われて来たものの、状況は一転。アリスの部屋へと入り、部屋戸へそのまま押しつけらてアリスに抱きしめられている。部屋の外装はピンクで覆われてて、違和感の無い女子部屋……という問題では無かった。彼女は時々、「良いにおい」と僕の私服の上から匂いを嗅いで、呟くがアリスのほうが良いにおい……ってそんな呑気な事を言ってる場合ではなかったたな。元々、家系が身長が高くも低くも無くて普通より少し低いぐらいの僕はアリスと身長差はそんなに無くて、僕の顎にアリスの頭部が当たるぐらい。黒髪で良い感じのツヤ加減。服装はピンクの水玉模様のパジャマ。至ってそこらへんの可愛い服装。そして、文句のつけようがない容姿。か、完璧だ。高鳴る僕の心臓の心拍数は異常数値を叩きだしてると言っても過言ではない。
「……蒼汰、さっきの続き言って」
「あ、う、うん。えっと入部テスト……するらしい、よ」
「……にゅ、入部テスト！？」

思い切り顔を上げたら、勿論、僕の顎をクリーンヒットをして舌からは鉄の味。顎を押さえて悶絶してる僕を差し置いて、「ど、どうしよ！」と挙動不審、且、遠足前日の小学生のようなはしゃぎ具合。

「ど、どうしよう。何を着て行こう……蒼汰は白黒のワンピースと全裸……どっちが良い？」

「白黒のワンピースで！」

アバウトな二択クイズすぎる。僕は頭の痛みを堪え天井を見上げて、溜息を漏らすのであった――「全裸ってなぁ……」

二話　入部テスト？

——ギリギリ、というよりかは何とかアリスを説得して制服姿にさせて僕は深月先輩に来るように言われた部室へと移動をしている最中。一応、常時、学ランという制服スタイルで居る僕とセーラー服と黒ストッキングでアリスは自分に似合う恰好で居る、って言う余談。

現在、位置する場所は何故か真っ暗であって、手元の懐中電灯を頼りに前進をしている。場所の説明になってしまったが学園本館の東階段下の掃除用具庫に入って、それまた下に繋がる階段を下りて、突き当りのところであって異常に埃臭い。そして今さら気になったのが一つ。

「琴音姉、朝から見てないな」

余計な呟き？　知ってる。アリスは驚いたのか拍子抜けな声を上げてしまう。

「ひゃ！」

思わず寄せられる腕、肩。思春期男子の僕にとっては刺激的であって生々しくて、動揺をしてしまったのか懐中電灯を床へと落としてしまい、光はその反動で消えて何も見えない暗闇状態になってしまった。

「……ご、ごめん蒼汰！」

汗ばんだアリスの手が僕の右手を掴み、声を震えさせながら謝りだした。何も悪いことは……無いとは言い難いのも事実。いや、何と言うか僕の余計な呟きが悪いのだが……何か府に落ちないというか、一応悪い、って気持ちはあるんだ。動きを静止して、「大丈夫だよ」とだけ伝えて、しゃがみ込み、無造作に真っ暗な床へと左手を精一杯伸ばして懐中電灯を探し出す僕。

「何か探し物？」

声が震えたと思ったら次は手までも震えだすアリス。僕は何を探

してるかと言うと床に落とした懐中電灯以外、何もないのだが。
「この状況で何を言うかと思えば……とりあえず手を離す――」
「嫌！」
全力否定をされた。待て、落ち着け僕。ここで手を離して何になる……捜索がし易いようになるよな、うん。僕の考えは間違ってはいなかった。
「懐中電灯、探すから手を離すんだ。そもそも――」
ギリッ、手を勢いよくアリスは握り、暗闇なのに殺意すら感じ取れる気迫……僕は言葉を失い、我に戻るなり、無言で左手で捜索を続けることにした。
「……静かになったね」
どこかの勇者な少女のせいです、という心の中のツッコミ。アリスの方へと手を差し伸べて、後方の方を手探りしてみると、何かに当たった……柔らかくて、布生地でって！？
「……積極的になったね蒼汰。彼女としては嬉しい限りだよ、えへへ」
照れくさそうに言ったと思われるアリスの発言に身の危険を感じたのかすぐさま、柔らかい物から手を退けて寒気を感じ取る。そして不意に頬に当たる優しくて生温かい風、もとい吐息は至近距離まで近づいている。手を離そうとしても剣道をしていたアリスの握力は平均女子以上で僕同等の握力と見た（弱いな、僕）。
「ちょ、アリス。こんなところで駄目だって！」
「……じゃあ、体育館倉庫の中が良かった？」
「どこのハードなエロティッカルなゲームだよ！！」
「……保健室の方が良い。ベットある」
「もう知らない！」
ヒロインの口から出るのはそこらへんのダウンロードして出来るゲームの代表的な部屋の数々って何でもない。話を元に戻すとこんな予定は無く、更に懐中電灯を無くす訳もなかった、が状況はおかしなぐらい変な方向へと進んでいる。進行形でバッドな方へと終焉

を迎えようとしている。
アリスの吐息が再び頬へと掛り、寒気がする……受け身で居る自分が恥ずかしいとかどうこうとかじゃなくて、単純に不純した展開へと持ち運ばれてしまっている自分が腹立たしいのだ。
「……蒼汰の彼女になれた。だから嬉しいだけなの。蒼汰はどう思ってる？」
いきなり質問を投げかけてくることに動揺する僕。アリスは嬉しいんだよな……僕は……。

「……えっとアリスと”前みたいに友達”で居られるから嬉しいよ」
考えた事を述べた僕は彼女へとそう回答をした。何を思ったのか分からないが、アリスはそっと手を離して、「……やっぱりね。アリスの想いは昔のラブレターの時、同様に届かないで終わるのね」と言う意味はおおよそ理解ができた。彼女を傷つけてしまったのはこの暗闇の中でも分かることで、僕は再びあの悪夢を繰り返してしまうと思うと胃がねじ切れそうに痛くなる……。
「……嘘」
「え？」
思わぬ言葉がアリスの口から出てくることに僕は馬鹿口を開けて驚く。向こう側には見えていないと思うが僕は凄く馬鹿な顔で居たと自負して言える。
「……今の心境は？」
「えっと……ごめん」
とりあえず平謝りに聞こえると思うが昔出来なかった謝罪というものをしてみる。笑い声でアリスは、「……大丈夫だって」と流してくれる。少しばかりか、心が身体が楽になった気分だ。
「ありがと」
「……蒼汰また謝ってる！」
「あ、ごめん！」
「……もう、蒼汰ったら」

自然と相手が見えなくても意思の疎通が出来たのか自然と笑い始める僕。つられてなのかアリスも笑いだす始末。何がツボで笑ってるのかも分からないが、きっとこんな感じの雰囲気がじれったくて、面白くて、くすぐったくて……楽しいからこそ笑ってしまったのかもしれない。

一閃と光を放出する方へと視線を預けた僕はいつものように仁王立ちして構えている深月先輩を見て、どことなく笑い涙が出てしまい、アリスも同様、笑い涙が出ておかしな光景を見たかのような深月先輩は「お前ら……何が起きたんだ？」と問いかけて来た。質問に答えるまでもなく、深月先輩は右手をおでこへと当てて深いため息を吐いたのであった。

「入部テスト、する以前の問題だったな」

青空のような外装壁。縦に長細い木製のテーブル。それを囲むように水色のソファーが両脇に一つずつ。これも全て琴音姉が作ったと思うと……らしくない感じがするが、部のために頑張ってきた琴音姉を想像するだけで益々、良い人っぽく思えてくる。悪い人に見えたことは無いがブラコン加減があると弟視点からは悪い人というよりかは怖い人に見えることがしばしば。話を戻そう。

ソファーに座ることを深月先輩に勧められて僕とアリスはお互いの顔が見えるようにと両端へ分けられて正面にはアリスが座っている。そして深月先輩が言った『する以前の問題』とはどういう風に捉えていいのかは分からないままだ……。

「深月先輩」

と意見を主張するために右手を上げて挙手をするもの無言の威圧とでも言うか、こちらをさげずむように凝視。そして舌打ち。ビビる僕を置いて、「……先輩」と独特のペースで喋り、挙手をするアリス。

「なんだ？　残念ながら蒼汰は俺を嫁にするって言ったからお前の物じゃないからな、とだけ言っておく」

決まり文句のようになってきた深月先輩は鼻を鳴らしてそんなことを言い、アリスは眉を眉間に顰めながらも質問を問いかける。

「……アリスはこの部活に入部したいです」

「構わない」

矛盾している。僕の尻を金属バットで殴ってまでも否定した深月先輩は何処へ？　首を傾げて僕は挙手もせず、「え？　良いんですか？」と訊くと、

「言っただろ馬鹿。する以前の問題だったなと。支え合ってこそ人って習わなかったか？」

とのこと。さっきまでの発言はどこへ消えたのかは分からないが僕はこれで全てが解放されて気分がスッキリしたのか、大きなため息を漏らしてソファーに寝転がり、天を仰ぐ。

「……蒼汰のおかげ。ありがとう」

お礼には及ばないが少し照れてしまう自分が居る。寝むそうなのを装って学ランを寝転んで脱いでテーブルにおいて俯きながら顔を隠す僕。そんな僕を笑う二人。やっぱり、この雰囲気が僕は好きだ。

「おじゃましま〜す！」

雰囲気をブレイクするように部屋に乱入してきたのは赤ジャージの琴音姉とメイド服が私服のミユ。思わず起き上がり、琴音姉は長い茶髪の髪を巻きあげてピン止めをしたスタイルで下ジャージのポケットから皺だらけのクチャクチャの紙を取り出して、見えるように開いた。その活字に注目する僕と深月先輩とアリス。

「「「第一七回　桜咲祭？」」」

三話　桜が咲く頃に

『――桜が咲き、またこの地で貴方と出会えることを……』

なんだろう。相部屋の葉也の謎の演技力。こんなことになったのはそもそもだな……。桜咲祭、別名文化祭を二週間後に控えていることを知った僕は入学式の時に渡されたライトノベル一冊分の量がある新入生案内書を自分の勉強机の上で熟読していた。文化祭という頭の中の話題から方向性が変わったのはここから。

「橘君がお勉強とは珍しいですね。私（わたくし）に出来ることならなんなりと」

いつにもまして、僕が勉強机と面している時の葉也の言葉が心に刺さる。確かに珍しいと思われても仕方ないが、言い方があると僕は思うよ。ライトスタンドの光を消して、頼りにしてくれ！　と言わんばかりの葉也へとその案内書を見せつける。

「あのなぁ……馬鹿にされた感がしたのは気のせいとして。桜咲祭についてなんだけど……」

その僕の一言は祭りが大好きな葉也の心に炎を燈してしまったみたいで今に至る。祭、好きだったんだな。

「桜咲祭と言えば、条咲（じょうさき）学園の中庭の桜の木の下のベンチで男女が昼飯を共にすると永遠と結ばれるというものがあるんですよ」

「なんかミユ達に聞かされた勇者伝説よりマシな気がするよ、まったく」

「それを言ってはおしまいですよ橘君。この噂を作りだしたのが我が勇者伝説研究部の成瀬部長ですからね。私（わたくし）も驚きましたよ」

何食わぬ顔で葉也はペラペラと舌が回転して言うが、あの深月先輩がか……。そういえば去年の今頃に深月先輩には思い人が居て、その人はアニメの主人公みたいな鈍感な人間で一つ下の男子生徒って琴音姉に聞かされた覚えがある。銀髪ツインテールで口は乱暴で男っ気ばっかで馬鹿なあの深月先輩が恋をしてしまった相手、そう考えると少し羨ましいかな。友達というのを超えて家族みたいな関

係って僕が一方的に思ってるだけかもしれないけど琴音姉みたいな年上のお姉ちゃんって感じがしてたんだよな……深月先輩って。
「橘君？」
「あぁ、ごめん。でも実際、その噂を垂れ流した深月先輩は結局はどうだったの？」
「どうもこうも……去年、あのベンチに深月先輩と一緒に座ったのは――」
ガキッ、ポキッ、グリグリ、いつにもまして怒りの籠った拳の骨の音。勉強机の椅子に座っていた僕からは見える銀髪のツインテールと天使のような笑みを浮かべる噂の深月先輩。どうやらこの前のように僕と葉也の部屋のドアを蹴り飛ばして侵入……畜生。そんなどうでも良い事より、戦慄……とでも言うか鳥肌と寒気が僕の身体中を駆ける。殺気を感じ取ったのか葉也は肩を震わせている。そのまま静かに葉也はぎこちなく後ろを振り返り……深月先輩の右手が顔面を上手に捉えて、「岩槻、お前の考えをこの右手でブレイクするぞ？　あぁ？」と一言。
――そう、葉也と何故か僕はこの場を乗り切る手段とは？　と考えた。結論、葉也と僕は深月先輩にビービー弾をエアガンでおでこへと数え切れない勢いで乱射された後、卒倒したのである。
「蒼汰も、俺との思い出ぐらい覚えてろよなっ！　この馬鹿者！」最後にその言葉を聞き僕は悶絶をしながら失神をしたのであった――
目を覚めると一番最初に目に入ったのは青空のような内装壁の天井。そして後頭部には柔らかい感覚。さすがにソファの柔らかさとは自覚済み。悩める思春期男子高校生の敵は柔らかさにあるとつくづく僕は思うぞ。

もう一度確認するがこの青空のような内装壁の天井は勇者伝説研究部の部室だ。
「起きたか蒼汰」
と少女らしい声が少しずつ近づいて聞こえてくる。声の主は大体想像が出来る。僕のため息を耳に入れた深月先輩は「俺よりミユが良かったか？」とのこと。何のことかさっぱり分からない。一応横へと首を振る僕。
「まぁ、良い」
そんな僕の素振りを見てなのか、深月先輩までもため息を漏らして立ち上がった。目覚めが良かったのか僕も立ち上がる寸前に女子用白いカーディガンが腹部に掛ってるのを見て呆然。
「深月先輩、これは……」
「ん？　……うぉ、い、いい、いや！　まだ五月初旬で肌寒いかなぁ～って思ったから持ってきたんだ。べ、別に蒼汰のために自室に戻って取りに行くなんてことしてないからな、安心してカーディガンに包まってろ」
どういう状況なんだ……。ましてや僕は自室で案内書を読んでいたはずなのだが……第一の疑問がこの部室に居ることだ。一旦、置いといてこの部屋の温度が高くて頬を染めているのか深月先輩は僕の足元に腰を掛けてそっぽを向きだした。
「ありがとうございます、深月先輩」
お礼を添えて僕は再び寝ようとしたところに、「蒼君、桜咲祭一緒に回ろっ！」と深月先輩曰く天然で少し思考回路が危ないミユが部室へと入ってきた、もとい乱入してきたのだ。聞き耳を立ててるかの様に無言になり僕の足の踝の上に軽く膝を乗せる深月先輩と重さに耐える僕という沈黙していてシュールな光景。そんな光景を目の当たりにしても呑気に回答を催促するように、「ダメ、かな？　先約でも居る……とかかな。女の子が先約だったらそっちを――」と困惑した顔でグダグダと言い続けて居てる。そんな困惑顔に苦笑いを加えたミユにどう対処して良いのかは分からないが僕は頷いて、

「良いよ」と返答。足に更に重みが加わり抓られて嫌な汗を背中に掻いているのは秘密事項。
「良かったな、ミユ」
ほぼ棒読み状態の深月先輩は足を組んで自分の膝に肘を立てて頬杖を着いている。何が楽しくないのか、唐突につまらなそうな顔でこちらを見てきてまたため息だ。確かに顔を見られてため息というのは嬉しくないよな。
「うん。もしかしてナッチー、蒼く……」
「ちょ、ミユ！」
怒号にも聞こえるように聞き取れるが僕の目の前では深月先輩がミユに抱き着いて脇腹をコチョコチョしているのだ。なんとも女子同士の絡みは思春期男子高校生からしては唯一の和みなのだ。
「ナッチーくすぐったいよ〜！」
「ミユにはお仕置きしなきゃいけないからなっ！」
「何でも良いですけど」
と前置きを置くとミユからは、「良くない！」とツッコミを入れられたが話を進めるようにスルースキル発動。僕は悪くないぞ。
「文化祭みたいなものって大抵、部活動やクラスでの出し物って有るじゃないですか。勇者伝説研究部は何を出し物にするんですか？」
僕にしてはまともな意見、だと思う。そんな発言を聞いた二人の先輩はきょとんとした顔でこちらを見つめてくる。いや、まともですよね。
「そりゃあ、お前……依頼を受ける何でも屋になるんだよ！」
「「……えぇ？！」」
絶対今考えたと思われる万屋になる予定の勇者伝説研究部の出し物。僕と何も知らなかった先輩であるミユはカルチャーショックのように驚き、動揺を意する声。深月先輩には届いていなかったのか、「え、ダメなのか？」という疑問を投げかけてくる。
「ダメとかじゃなくて、去年は何をしたんですか？」
少しの間。一体、先輩達は去年、琴音姉と何を出し物に……まさ

か、先生を出し物な訳ある訳ない。そもそもこの部に顧問なんて……数学教師の佐藤先生が顧問と言う風の噂だけ聞いたことはあるが。

「去年は何もしてないよ」

とミユは苦笑い。なるほど。だから驚いたのか。

「それにミユは身体が弱いから、運動や驚愕することは医者に控えて貰うように頼まれてるんだ」

それは初耳。

「ナッチー、蒼君にそんなこと言わなくて大丈夫だったのに」

「蒼汰だからこそ言う意味あるだろ？」

ご立腹のミユとそれを冷静に悟ってもらうように促す深月先輩。

「確かに知ってって損じゃないし、ミユの力になれれば僕も嬉しいから」

「う、うん。あ、ああ、ありがと」

挙動不審に照れた表情を浮かべるのはミユだけじゃなくて僕もであって、そんなお互いの表情を見つめて深月先輩はジト目で、

「なんか昔の出来事にあったかのようなデジャブなような……」

とのこと。男と言うのは誰かを守ってあげたくなる生き物なのさ、深月先輩よ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0747v/

勇者って呼んでっ！

2011年10月7日03時15分発行